

スペインのアメリカ植民地における二つの艦隊
ー海賊との戦いー

日本海事学会例会 2018 年 3 月 24 日

山田義裕

目次

1. はじめに	2
2. <u>新大陸の海賊</u>	3
1) 誰が、どうして海賊になったのか	
2) バッカニア	
3) 初期のフランスの海賊	
4) エリザベス女王の海賊	
5) オランダの海乞食	
3. <u>バルロベント艦隊</u>	11
1) バルロベント艦隊の創設	
2) ヘンリー・モーガン	13
4. <u>南海艦隊</u>	16
1) 南海艦隊の始まり	
2) キャベンディッシュ	
3) 南海艦隊の船の調達ーバルロベント艦隊との違い	
4) 艦隊の財源	
5. <u>南海の海賊達</u>	21
1) 南海最初のオランダ人達ー同行したウィリアム・アダムスとヤン・ヨーステン	
2) ヴァン・シュピールベルゲンによる南海艦隊の撃破	
3) オランダ人のルメールとスハウテンによるホーン岬の発見	35
4) ジャック・レルミト率いるナッソー船隊のカリャオ封鎖	

5) バッカニア海賊シャープによる南海の略奪	
6) シャープ船隊のトーマス・ダンピアとバッカニア地図	
6. 両艦隊の最後	5 1
7. Bibliography	5 2

1. はじめに

コロンブスが大西洋を横断して西に向かった当初の目的は、地球を西回りして日本の黄金を手に入れることであった。しかしアジアには到達せず、アメリカ大陸を発見した。そこで、スペインの征服者達はメキシコとペルーに古代から続く二つの帝国を見出してこれらを征服して、黄金を手に入れた。スペイン人達の飽くなき黄金の追及は続き、ついに 16 世紀中頃に現在のボリビア南部にポトシの銀山に至って、ここから約 3 世紀に渡って莫大な銀を本国へ送り出した。当時の南米のスペイン領はペルー副王国として統治され、ペルーの銀、ペルーの財宝として、ヨーロッパ列強の垂涎の的となった。その後アメリカのもう一つの副王国メキシコにも銀山が開発され、またメキシコで産する水銀を使ったアマルガム法は銀の生産量を飛躍的に増大させた。

ヨーロッパ列強は、スペインがアメリカから持ち出す銀、金、真珠、そしてマニラ・ガレオンがもたらす中国の絹、貴金属装飾品などの財宝を航海の途中で奪うことを始めた。それを狙った海賊行動からスペイン本国への航海途次の船を守るために護送船団方式が 16 世紀 20 年代から始まった。最も大胆かつ多大な成果を最初に挙げたのはフランシス・ドレイクであった。

最初はスペイン本国へ運ばれる財宝を狙った海賊は、新大陸では多島海で隠れ家の多いカリブ海に根拠地を置き、その活動を同地域での通商と植民設営地を狙うことに拡大し、同海域からフロリダにかけてはびこっていった。このようなカリブ海での海賊対策のために創られたのがバルロベント^{アルマダ}艦隊であった。

ペルーの銀の魅力に魅かれて、大西洋側から南米南端の航海の難所を乗り越えて、ペルー副王国（現在ペルー、チリ、エクワドルー帯）の銀船隊とスペイン人の植民設営地を襲う海賊が現れるようになった。また、英国人ヘンリー・モーガンのパナマ地峡横断の海賊行為の大成功をうけて、カリブ海^{アルマダ}の海賊達がパナマ地峡を横断してペルー副王国を荒らすようになった。ペルーからパナマまでのこの重要な銀のルートと沿岸植民設営地の防衛と保護のために南海艦隊が創設された。

今回のレポートは、この二つの艦隊^{アルマダ}の盛衰と海賊との戦いを報告するものであるが、カリブ海については、「カリビアン・パイレーツ」として多くの冒険譚、小説の類い、映画で紹介され

ることが多い。海賊達が隠した宝探し、大きなガレオン船を襲う冒険、残忍な行為、酒、売春、喧嘩の乱痴気騒ぎに明け暮れた生活などが紹介され、時には面白おかしく味付けされているものもある。日本でも、何冊もの本、翻訳書が出版されている。しかし、南海（^{サウス・シー}South Sea）、すなわち太平洋の南米西岸一帯の海賊との戦いについてはあまり紹介されていないので、今回のレポートは、どちらかといえば南海艦隊と海賊について焦点を当てたい。それにはもう二つの理由がある。一つは南海の海賊の中に、日本で良く知られたウィリアム・アダムスとヤン・ヨーステンが居たことである。そしてもう一つは、同地域の重要地点の詳細な地図・海図が海賊によって作られたが、わが国ではまだ知られていないので、これを紹介したいことである。

2. 新大陸の海賊

1) 誰が、どうして海賊になったのか

本来ヨーロッパにおける海賊の歴史は古く、バイキングを持ち出すまでもなく、英仏海峡、北海、バルト海など、またその沿岸は常に海賊の脅威に晒されていた。国と国との間に戦端が正式に開かれていれば、敵国船を正式に拿捕できたが、そうでない時の船の拿捕はすべて海賊行為である。自国の利益のために、この海賊行為に認可状（コミッション）を与えた場合を私掠（プライバティア）と呼んだ。しかし海賊であることに変わりはなく、認可状があれば、自国あるいは場合によっては同盟国の官憲に見逃されるだけで（ただし上納金を払う）、当然ながら敵国あるいは第三国にはなんら効力はなかった。また、ヨーロッパ列強間での戦争、平和、中立状態は常に微妙であり、その時の各国間の関係によって、私掠の認否は別れた。特にヨーロッパから離れたアメリカでは、効力の捉え方は異なった。また同じ国内でも、植民地と本国とでは利害が異なることも多かった。一般的に、ヨーロッパの本国同士が平和条約を結んでも、植民地間ではなかなかその条約が守られることはなかった。イギリスもフランスも、その時の総督によって海賊、私掠の扱いが異なった。私掠認可状は原則的に、総督レベルで発行出来、多くの認可状を発行した総督らがいた。それは自らの植民地に海賊船を入港させ、略奪品に対する税金で港の繁栄を狙うものであった。イギリスの海賊ヘンリー・モーガンは総督モディファードと組んで暴れまわり、あまりにも両者の行動が目には余るので、二人は本国へ罪人扱いで召還された。しかしモーガンはかえってサーの称号を授けられ大衆の喝さいを浴び、モディファードはロンドン塔に幽閉されたが、両者それぞれ、副総督と裁判長としてジャマイカに戻った。もちろん本国の意向を忠実に実施し、海賊を厳しく取り締まる総督もいた。

カリブ海に海賊がはびこったわけであるが、国籍、人種は種々であった。イギリス人、フランス人、オランダ人、アイルランド人、スコットランド人の他に、もちろんスペイン人やポルトガル人もいたが、スウェーデン人、ギリシャ人、等々といった具合であり、それは海賊に加わった理由にも関係していた。親から新大陸に身売りさせられ年季奉公に出た若者・子供で年期

奉公明けとなった者。本国で食い逸れて海員となってから船を逃げ出した者、海軍での厳しさに耐えられなくなって逃げ出した者、一攫千金を夢見た者。逃亡奴隷、お尋ね者の犯罪者。そして見逃せない理由は、宗教上の被迫害者である。イギリス、スコットランド、アイルランドでのカトリック教徒、フランスでのユグノーの新教徒などである。また、もう一つ見逃せないのが密貿易の禁止であった。スペインは新大陸での通商、貿易をスペインの独占として、他国の通商を許さなかった。他国から見れば、通商の大市場であり、スペイン植民地の各地に散らばった居住地から見れば、僅かなスペイン船からの供給では欲しいものが手に入らず、他国からの密輸品は喉から手が出るほど欲しかった。この密貿易船はチャンスがあればいつでも海賊船に早変わりした。オランダではアントワープが陥落した時に、多くは北のアムステルダム等へ移ったが、行き場を見付けられなかった者も多かった。オランダには「海乞食」の海賊団の活躍が知られている。言語の関係上、また私掠許可の関係上イギリスやフランスのように同国人がグループを組む傾向はあったが、海賊達は国籍にこだわりがなかった。

2) バッカニアとフィリブステーロ

海賊に種類があったかという点、上記したように私掠という、どこかの国の許可を得たものがあったことを述べたが、これは一つの範疇と言えないことはない。しかし、海賊は海賊で、とりわけの分類は無い。ただ、その発生の仕方によって特徴を持つ者達がいた。カリブ海で特徴的な海賊にバッカニア (buccaneer) がいる。これは、現地の原住民がブカン(boucan)という木枠の上に動物の肉を載せて燻製にした言葉に語源がある。1605年にスペインの総督はエスパニョーラ島にいるスペイン人植民者達がオランダ人などの海賊と密貿易を行い、時には海賊行為を行うのに業を煮やし、これらの住民を徹底的に追討した。残された土地には家畜が野生化して増えた。こうしてスペイン人がいなくなった土地に外国人が入り込んで、野生化した家畜を食べて暮らすようになった。そのうちに燻製肉を通りかかった船や海賊に売って商売をするようになったのがバッカニアの成り立ちである。当然のことながら、彼等は海賊の予備軍となった。彼等は普通数人のグループで暮らした。こうしたバッカニアがはびこり出したため、スペイン当局は、今度は野生化した家畜を絶滅させようとした。生活の糧を奪われたバッカニア達は海賊家業に専念するようになる。エスパニョーラ島の北西部の沖にある小さなトルトゥーガ島に特に集まった。ここのバッカニア達は自分達を「沿岸の同朋」と呼んだ。様々なことが投票で決められ、これを一種の民主主義社会に擬する現代の考え方がいくつかの書物に見られるが、野蛮で残虐で、不法者達の仲間内での暮らしをそのように見立てるのは大いに無理がある。バッカニアの別称としてフィリブステーロ(スペイン語 *filibustero*、英語では *freebooter*、オランダ語 *vrijbouter*) がある。この語源ははっきりしないし、バッカニアとの差異もはっきりしない。スペイン語の書物はバッカニアよりもこちらを多用しているようである。特に、南海に侵入したバッカニアにはこの呼称を使っていることが多いように思えるが、本報告には一

一般的に馴染みのあるバッカニアを用いる。

3) 初期のフランスの海賊

1525 年ころよりフランスの海賊と密輸船がカリブ海に多く出没するようになった。それから 1540 年代にかけて、スペインとフランスの間に何度も戦争が起こり、また平和条約が結ばれるという繰り返しの状態が起こった。平和条約が有る間も海賊、私掠行為は収まらなかった。この状態がスペインのインディアス航路の護送船団方式の採用につながった。平均的に 20 数隻の船から成るこの船団は（一般的には「インディアス航路船隊:Flota de Carrera de Indias」と呼ばれたが、護衛料を保険料として取ったので「海損保険船隊」とも呼ばれる。俗称として「財宝船隊」がある。）、軍艦の護衛がついていたが、あくまで主体は商船であるので「船隊 flota」と呼ばれた。それに対して軍艦からなる公認軍事組織は「艦隊 armada」と呼ばれ厳密に区分されていた。1555 年 7 月にフランスの残忍なことで知られる（カナリア諸島でポルトガル船を拿捕し、乗っていたイエズス会士 38 名を海へ突き落した）ユグノー教徒ジャック・ド・ソドレに率いられた私掠船 4 隻がキューバのハバナに上陸し、町を占拠した。町を焼かない代わりに 3 万ペソ、スペイン人捕虜一人当たり 500 ペソ、その捕虜が所有する奴隷一人当たり 100 ペソの身代金を要求した。スペイン人が密かに海賊達に急襲を仕掛けたが失敗すると激怒したソドレは黒人奴隷を町外れで逆さ釣りにして射撃訓練を行った。ソドレは町と捕虜の身代金を得て、砲台にあった大砲 12 門を持ち去った。カトリック教徒のスペイン人と、海賊とみなす新教徒のフランス人との間の戦いは残虐で、フロリダ半島のフランス人居留地に絡んだスペイン人指揮官ペドロ・メネンデス・デ・アビレスによる大虐殺にまで発展した。フランス人の海賊行為は 50 年後によりやく下火となった。それはフランス国内での宗教戦争が激化していたからである。

4) エリザベス女王の海賊

フランスの海賊が跳梁していた間、スペインとイギリスの両国の関係は良好であった。しかし、フランスでのユグノー戦争が、カトリックのスペインと新教のイギリスとの代理戦争の様相を呈し始め、1550 年代末には両国関係は冷え、1558 年のエリザベス 1 世の即位によって紛争を起こすようになった。一つの原因は、スペインが新世界での通商を独占したことであった。ジョン・ホーキンスは、最初にアメリカとの奴隷貿易に目を付け、1562 年に西アフリカのギニアで奴隷を購入し、サント・ドミンゴで売り、多額の利益を得た。これに味をしめ、1565 年に女王の持ち船で奴隷商売を行ったため、スペインの駐英大使は抗議を行った。1568 年の第 3 回の黒人取引には 28 歳のフランシス・ドレイクが乗り込んでいた。前回は奴隷取引が上手くいった現在のコロンビアのリオアチャで、今回はスペイン側の拒否に出会い、砲撃戦となっ

てしまった。その後キューバ沖に至った時嵐に巻き込まれ、メキシコ湾に入った。9月15日、ベラクルスの対岸サン・フアン・デ・ウルアに近づいた時、スペイン側はホーキンスが掲げた偽の国旗に欺かれ、到着が予定されていたスペインからの財宝船隊と誤認したため、英国船隊は易々と入港してしまった。17日に財宝船隊が入港してきたが、天候が悪く停泊出来たのは



サン・フアン・デ・ウルアの要塞跡 2017年7月山田撮影



21日であった。財宝船隊には新しく副王に着任したマルティン・エンリケスが乗船しており、エンリケスは英国船隊に攻撃を仕掛け、2隻を除いて破壊するか拿捕をした。2隻の内の1隻にホーキンスとドレイクが乗り組んで、命からがら英国に戻った。この事件を境に英国のスペイン・アメリカに対する感情が一変し、攻撃的な海賊行為を行うようになった。その後もドレイクは何度かカリブ海へ海賊行を行ったが、大きな戦果は上がらなかった。

1577年11月300トンのゴールデン・ハインドを旗艦としたドレイクの5隻の船隊でプリムス港を出航し、アフリカ西岸、ブラジルを経由後、マゼラン海峡を越えて、1578年にホーン岬を発見した。そしてチリとペルーの沿岸を荒らして回り、途中でペルー副王国の120トンのヌエストラ・セニョーラ・デ・コンセプション号（綽名のカカフエゴ号でも知

られる)を捕獲した。同船の積荷は銀 26t、金 80、貨幣と装飾品£20 万と言われた。その後メキシコのメンドシーノから太平洋を横断して、モルッカ諸島、を經由、喜望峰を西へ迂回して、マゼランに続く史上二番目の世界周航を果たし、ゴールデン・ハインド号 1 隻だけがプリムス港に 1580 年 9 月に帰着した。獲得した財宝は£30 万ポンドを超え、これは当時のイングランドレイクによるサント・ドミンゴ攻略の図：16 世紀のバプチスタ・ボアジオの作



ドの歳入よりも多かったという。エリザベス女王よりサーの称号を授かったドレイクが再びカリブ海に戻り、エスパニョーラ島に 1586 年 1 月に現れた時には 21 隻の軍艦に 2,300 人の兵士を載せた大艦隊であった。首都サント・ドミンゴを荒らし、町を焼き、住民より 25,000 ドゥカードを受け取った、2 月にはカルタヘナを襲った。総督はサント・ドミンゴ略奪の報告を受けて準備をしていたが、戦力は圧倒的に劣り、町は陥落し、町を焼かない代償として 107,000 ドゥカードを受け取った。ドレイクはフロリダとヴァージニアを經由して英国に戻った。

ドレイクも参加した 1588 年の無敵艦隊との戦いの後、英国はスペインとの 15 年に渡る紛争の間、年間に 100~200 回の私掠船をイギリスから出航させて、年平均£15 万~30 万の獲物を奪ったという。

5) オランダの海乞食

15 世紀の後半に、ネーデルランドの 17 州は、スペインと同じハプスブルグ家の所領となっ

ており、スペインとの商業的な結び付きは強かった。しかし宗教改革でカルヴァン派が多い同地域を抑圧するようになり、異端審問による宗教的締め付け、都市の自治権の剥奪、市民への重税の課税が行われようになった。ナッソー伯とブレーデローデ伯が中心となって反スペインの同盟を結成し、1566年4月5日にブリュッセルの宮廷に出向き、トリエント公会議の決定の強制執行を止めるよう訴え出た。この時、対応した総督パルマ公妃マルゲリータに対して、廷臣が「彼等は『ゴイセン（乞食）』の群れにすぎません」と説明したことから、「ゴイセン」と呼ばれるようになり、また自らもネーデルランドの愛国者として、そう自称するようになった。ゴイセンの反スペイン的行動は、新たに派遣されたアルバ公爵によって苛烈な弾圧を受け、10万人ほどが国外に逃れた。彼等は「^{ワーター・ゴイセン}海の乞食団」という海賊組織を創り、オラニエ公の私掠特許状を持ってヨーロッパ海域で海賊行為を働いた。オランダは海上勢力の進展に伴い、アフリカ、東インド、ブラジル、カリブ海域にも通商の手を広げた。ベネズエラ海岸での真珠、同海岸のアヤラの塩田での塩、エスパニョーラ島での皮革等の買い付けによる商売が典型的なものであった。スペイン当局はこうした密貿易を厳しく取り締まり（1593年、ヌエバ・アングリア〔ベネズエラ〕沖でのオランダ船19隻の逮捕）、スペイン人住民を強制退去させたが、（1605年8月、サント・ドミンゴ島パヤアの住民退去）かえって海賊を増加させることとなった。名高いオランダの海賊はピーテル・ピーテルスゾーン・ヘイン（通称：ピート・ヘイン）で、1628年9月、31隻（大砲679門、海員2,300人、兵士1,000人）を率いてキューバのマタンザスの港でスペインの財宝船隊を追い詰め、全部の船を捕らえた。遠征費用を差し引いても700万ギルダー以上の利益が出たという。アムステルダムでの凱行行進には100頭のラバの荷車が続いた。



キューバのマタンザスにおけるピート・ヘインの艦隊：当時の版画

3. バルロベント艦隊

1) バルロベント艦隊の創設

今まで述べてきたように、16 世紀後半より 17 世紀初頭にかけて、カリブ海における海賊の活動は激しくなり、地元はもちろん、スペイン本国でも常にその対策に頭を悩ますようになったが、ヨーロッパでの紛争のために、植民地での対策に割く資金が不足して、具体的な行動はとれなかった。まずは、地上での要塞の建設が急がれた。16 世紀後半に築城の名手で、スペイン本土、アルジェリアで最新の要塞を築いたイタリア人のフアン・パウチスタ・アントネッリ（1527 年～1588 年）がカリブ海を訪れて調査を行った。その中でハバナ湾の湾口にモーロ城（正式には「カスチーリョ・デ・ロス・トレス・レイエス・マーゴ・デル・モーロ」）が 1610 年に完成した。

プ
ン
タ
砦



モーロ要塞の俯瞰図：2017 年 7 月に山田が撮影

本図はサン・サルバドル・デラ・プンタ城（通称プンタ砦）内に展示されている。

このプンタ砦はハバナ湾口のモーロ砦の反対側の岬にあり、敵襲の恐れがある時は、両砦の間に大きな鉄鎖を渡し、船が湾内に入れなくした。そのため 1762 年の英国艦隊は、一部が近くのコヒマル（ヘミングウェイの「老人と海」の舞台となった漁村）に上陸した。ここに小要塞があったが、その時破壊された。その後再建され、現在でもヘミングウェイの胸像の正面に建っているのが見られる。

コヒマルの小要塞： 山田撮影



モーロ城の写真

アントネッリは、こうした陸上に固定的に設置された要塞に対し、艦隊は海上を移動して、補助的な役割を果たすと考えた。その役割を次のようにとらえ、後に実現するバルロベント艦隊の機能を正確に認識していた。

すなわち、バハマの諸島の瀬戸を通過するガレオン船に同行する。その際、キューバ島の西端のサン・アントン岬においてヌエバ・エスパーニャ（メキシコ）のベラクルスから来る船隊

を待つが、ガレオン船の到着が遅れた時は、ポルトベロからハバナまで銀（ペルーからパナマ地峡を越えて来る）を輸送する航海の護衛の便宜を図る。残りの時間は海賊が最も多く横行する場所の巡視に使われる。250~300 トネラーダの船が 8~10 隻あれば十分と考えた。

こうした考えは、現地の多くの者達が抱いたアイデアであったが、結局は資金不足で、従来のスペイン本国と新大陸間の護送船団の護衛艦の増強で済ませれば良いという議論に落ち着いてしまうのが常であった。そして独自のカリブ海の艦隊（バルロベント艦隊）を持つことに反対する意見も少数ながらあった。その理由は、一定の港に停泊している艦隊は、敵襲の連絡が遅れたり、風向きによって間に合わないことがあったりするというものであった。

上記のベネズエラのアヤラの塩田には 1598~99 の 2 年だけで 300 隻の船が来航したという。こうした事態を受け、バルロベント艦隊の具体的な検討がなされるようになった。1600 年に「バルロベント諸島に定着するための何隻かの小型の船を準備するべし」という勅書が出された。

著者は、艦隊の名前の出所はこの文書ではないかと考えている。護送船団がスペインからカリブ海に到着する時にまず通過するのが小アンチル諸島のバルロベント諸島であった。「バルロベント」はスペイン語で「追い風」を意味する。

1605 年にフェリペ 3 世の承認によって、同年 9 月 9 日に、護送船団の司令官ドン・ルイス・ファハルドの指揮下で元々大西洋艦隊の一部であった船とビスカヤ艦隊の一部の船から成る小艦隊がリスボンを出航し、アヤラへの巡察などカリブ海で一時的に任務についたのをバルロベント艦隊の準備的な活動と位置付けることが出来そうである。ルイス・ファハルドは、バルロベント艦隊は護送船団の一部と考えたようである。後年にバルロベント艦隊が設立された後も、しばしば護送船団の護衛艦として使われ、カリブ海を不在とすることも始終生じた。

1607 年には具体的な計画が実行に移された。全てが同一性能で、艦隊行動がしやすいように、また船具が使い回しできるように、各船が全て 300 トネラーダのガレオン船 8 隻をハバナで建造する計画で、メキシコからハバナへ送られる予算もつき、木材も準備された。しかし、1610 年に 4 隻が完成すると、全てがスペイン本国へ送られてしまい、バルロベント艦隊の実現は挫折した。このような護送船団への転用は、同艦隊の歴史を通じて始終起こったことで、南海艦隊とは異なっている点である。その生誕のきっかけからも、インディアス航路船団の途中までの護衛という役割からも、また究極としては本国の金の無さからも、起こるべくして起こったことである。

1635 年の勅書が、カリブ海の防衛を任務としたバルロベント艦隊の設置を決めた。このために奔走したのはヌエバ・エパーニャの副王カデレイタであった。その後、旗艦の 500 トネラーダのガレオン船 1 隻、^{アルミランタ}副司令艦の 400 トネラーダのガレオン船 1 隻、ガレオンセッテ船 4 隻（各 300 トネラーダ）、パタチェ船 2 隻（各 150 トネラーダ）、そしてピナス船 2 隻（各 50 トネラーダ）、海員 580 名、兵士 620 名の大艦隊の構想が持たれたこともあったが、そのような資金

が捻出できるわけもなく、立ち消えとなった。こうした大構想は 2 世紀に渡って何度か登場したが、実現したためしがない。それは南海艦隊でも同じであった。大構想であるとはいえ、この計画でエッセンスとなるのは、1 隻の旗艦と 1 隻の副司令艦^{アルミランタ}、そして 2 隻のパタチェ船と小型補助艦艇であり、今後この編成がバルロベントと南海の両艦隊の構成として基本となるものであった。旗艦と副司令艦^{アルミランタ}は万一の場合に補完性を有すること、また大艦隊編成の敵へのフレキシブルな対応の観点から必要であり、2 隻のパタチェ船は通報艦として欠かせなかった。

実際に、船が整備されたのは 1640 年と見られる。450 トネラーダのジャマイカで建造されたナオ船が旗艦となり、6 隻が揃えられた。他の 5 隻は、300 トネラーダのラ・コンセプション号がトネラーダ当たり 48 ドゥカードで、230 トネラーダのヌエストラ・セニョーラ・デ・ロサリオがトネラーダ当たり 52 ドゥカードで、400 トネラーダのサン・アントニオ号がトネラーダ当たり 23 ドゥカードで買い上げられた。そして 150 トネラーダのパタチェ船 1 隻と、カンペチェで建造されてベラクルスへ到着したばかりの 400 トネラーダの新造フリゲート船 1 隻が徴用された。

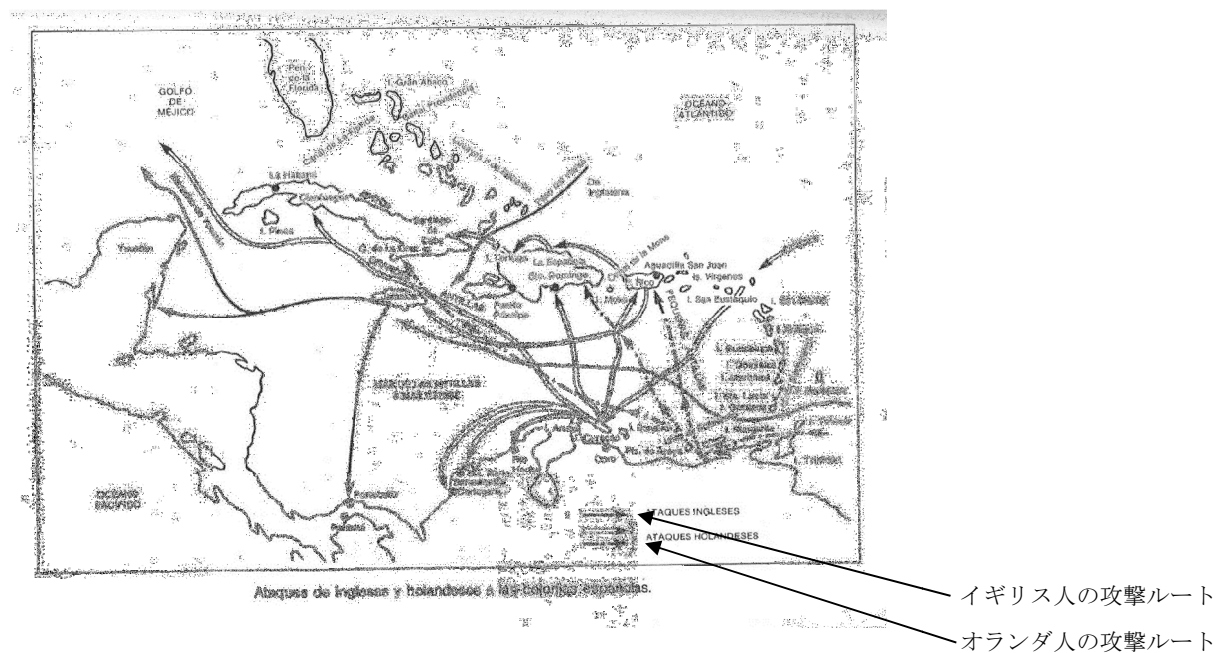
バルロベント艦隊の最初の航海は 1641 年 7 月 23 日に次の 8 隻でもって、22 隻の商船をベラクルスからハバナへ護衛するものであった。途中で嵐に合い、36 日かかり、2 隻が失われた。

船名	トン数	大砲数
サンティッシモ・サクラメント（旗艦）	350	26
ラ・コンセプション（副司令艦） ^{アルミランタ}	350	20
サン・アントニオ	300	16
ヌエストラ・セニョーラ・デ・ロサリオ	-	16
ヌエストラ・セニョーラ・デ・ラ・ペーニャ・デ・フランシア	170	10
ラ・カンデラリア	300	20
サンタ・アナ — ガルサ・デ・ビリェーナ	200	11
サン・ホセ	200	12

2) ヘンリー・モーガン

ヘンリー・モーガンは 1635 年に英国に生まれ、年季奉公の労働者としてカリブ海に来た。1668 年に、12 隻の船に 700 人ほどのバッカニアを伴ってキューバのプエルト・デル・プリンシペ（現在のカマグエイ）を襲い財宝を得た。同年に今度はアメリカ第 3 番目の都市ポルトベロを襲った。この町の守備は堅固で、三つある砦を順に攻めた。最後の砦ではスペイン人の神父や修道女を盾に攻撃したが、スペイン側も手を緩めなかった。しかし、ついに町は陥落し、いつものように泥酔して、殺人、レイプを行い、財貨の隠し場所を白状させるために拷問をお

こなつた。8レアル銀貨 50 万枚、多くの財宝が見付かった。1670 年末に、ペルーからの財宝、マニラ・ガレオンからの絹や財宝が集まる太平洋側のパナマ市の攻撃を行った。この遠征はパナマ地峡を陸路徒歩で攻めなければならず、まず 40 隻の船と 2,000 人のバッカニアで大西洋岸のサン・ロレンソの砦を占拠した。此处で 36 隻の大きなカヌーをつくり、1,400 人を引き連れてチャグレス川を遡上した。7 日間かけて、ジャングルを飢え、熱病、原住民の襲撃に悩みながら踏破しパナマ市の裏手にたどりついた。スペインの歩兵 2,100 人と騎兵 600 人を撃退、スペイン側のインディオが放った牛 2,000 頭をお得意の射撃で撃退した。スペイン人達は市を破壊してジャングルに逃げた。1 ヶ月かけて逃げたスペイン人達を見つけ出して拷問を行い、財宝を出させた。8レアル銀貨 75 万枚、大量の金銀の延べ棒、真珠、絹、宝石、香料を手に入れてサン・ロレンソ砦に戻った。そこで分け前の分配をめぐる海賊達の間で争いが起こった。モーガンは仲間達に何も告げず、さっさとポート・ロイヤルへ戻り、大歓迎を受けた。



地図 1 イギリス人とオランダ人によるスペイン植民地への攻撃

当時のジャマイカのポート・ロイヤルは英国がスペインから奪い、総督が私掠特許状を乱発し、海賊達の天国になっていた。モーガンのパナマ略奪が本国に伝わると、当時英国と和平状態にあったスペインは、海賊を処罰しなければ、宣戦布告すると国王チャールズ 2 世に迫った。国王はモーガンとモディフォード総督を本国に召還した。総督はロンドン塔に幽閉されたが、モーガンは罰せられるどころではなく、大人気を博してサーの称号を授与された。モーガンは

裁判所の判事としてジャマイカに戻り、副総督までなった。表面上は海賊退治を標榜したが、海賊達のためにフランスの総督に私掠特許状を出させて、リベートを得たりしていた。その内に厳格なヴォーン総督と衝突し、1683年に公職追放となり、居酒屋に入り浸り、1692年に死んだ。

彼の太平洋側へのパナマ地峡横断はバッカニア達の南海における海賊稼業の端緒となり、南海艦隊を悩ませることになる。

ヘンリー・モーガンの肖像版画



3. 南海艦隊

1) 南海艦隊の始まり

スペインのアメリカ植民地を防衛したもう一つの艦隊は南海艦隊（アルマーダ・デ・マル・デル・スル、Armada de Mar del Sur）であった。マル・デル・スルは英語でサウス・シー（South Sea）、日本語に直訳すると「南海」となる。バルボアがパナマ地峡を横断して始めて太平洋を見た時、その穏やかな海の様子から太平洋の名前が付けられた。スペイン人が使った南海（Mar del Sur）という用語は、アメリカ大陸の北はカリフォルニアから南はホーン岬までの太平洋の東の部分を目指す。従って、マル・デル・スルという用語の翻訳に日本からアメリカ大陸までを覆う大洋全体を表す現在の太平洋という言葉を使うとイメージを誤る。また英語でもサウス・シーという訳語を使っているので、著者は南海^{サウス・シー}という訳語を使うことにする。

南海艦隊はバルロベント艦隊のように、その創設を窺わせる公文書はない。何時からその名称が使われるようになったかについても、言及している書物を著者は管見にして知らない。

イギリスの海賊ジョン・オクセンハムは 1575 年にパナマ地峡をカリブ海側から横断して、パナマ湾のペルラ諸島（「真珠諸島」の意味）で待ち伏せして、ペルーから金を運んで来た船を捕まえた。ペルーの副王フランシスコ・デ・トレドは、今後の海賊対策のために 2 隻のガ

レー船をグアヤキルで建造するように命じたが、1 隻だけしか完成せず、サンチアゴ号と名付けられた。同船には大砲も無く、漕手もおらず、1578 年にドレイクが来襲した時には、焼かれないように隠しておいた。この船をもって、南海艦隊の始まりと考えてもよいかもしれない。前述したように、この時ドレイクはペルー王国において、カカフエゴ号という 120 トネラーダの船を捕獲したが、同船は 36 万ペソ（スペイン側の資料）という財宝を積んでいた。ペルーの銀をパナマへ運ぶ船を護衛するために、副王フランシスコ・デ・トレドは 3~4 隻の船を送るように本国へ要請したが、回答は、「そちらで建造され、とりあえずは手持ちのガレー船で護衛されたし」というものであった。副王は、マゼラン海峡を敵船が通過できなくするために同海峡の兩岸に大砲を備えることを考えた。1584 年にペドロ・サルミエント・デ・ガンボア以下の者が同海峡に派遣された。しかし気候が過酷で、糧食を入手できる人里からは遠く、砦の建設もままならないことから、ガンボアは、迎えに来るので待つようにと指示して現地に何人かを残してペルーに戻ったが、彼等を迎えに行くことはなかった。置き去りにされた者達は皮肉にも 1587 年 1 月にマゼラン海峡を越えて来た英国の海賊トーマス・キャベンディッシュに救われた。

2) キャベンディッシュ

英国の海賊キャベンディッシュは 120 トンのデザイアー号に乗船し、もう 2 隻と共に 2 月 24 日に、大西洋から南海に抜け、チリ沿岸で 9 隻のスペイン船を捕獲した。捕らえたピロートから、マニラ・ガレオンがフィリピンから戻るとの情報を得て、11 月 4 日にバハ・カリフォルニアで 600 トネラーダのマニラ・ガレオンのサンタ・アナ号を襲った。同号は積み荷を多くするために大砲を積載しておらず、小さな英国の 2 隻の船に敗れてしまった。サンタ・アナ号には探検家セバスチャン・ビスカイノが乗船していた。キャベンディッシュは乗っていた 2 名の日本人をアジアへ向かう時のことを考えて連れて行った。サンタ・アナ号は 12 万 2000 ペソ相当の金の他に絹、香料などの多くの財宝を積んでおり、スペイン側は 200 万ペソの損害と見積もった。キャベンディッシュはその後、グアム、フィリピン、ジャワ等を訪れた後、喜望峰経由で 1588 年 9 月 9 日にプリムスに帰国した。デザイアー号に招かれたエリザベス女王からナイトに叙せられた。英国では無敵艦隊の勝利と重なり、キャベンディッシュの成功も同時に祝う祝宴が開かれた。この時彼はまだ 28 歳であった。

3) 南海艦隊の船の調達 ―バルロベント艦隊との違い

ペルーの副王トレドはスペインに南海の警備用に船を本国から送ってくれるように要請したが、ペルーで造るようにと体よく断られ、ガレー船 1 隻をグアヤキルで建造した。そして数隻の商船を購入して武装を行った。このエピソードの中に南海艦隊における船の調達のこれ以降

の歴史のエッセンスが要約されている。

まず、本国からペルーで建造するようと言ってきたことは、十分に道理のあることであった。当時、マゼラン海峡を船が通過して来ることは、実例は少なく、極めて危険というか至難のことであった。またその理由故にこそ、16~17世紀にかけてのペルーの副王達は大西洋から海賊が侵入してくることはまずないと、高をくくって防備を怠った。また海賊達はその裏をかくことによって、急襲に成功したのであった。当時、現在のエクアドルのグアヤキルにおいて造船業が興りつつあり、グアヤス河の河岸に船台が置かれ、河口中に在るプナ島で艀装が行われた。その理由は、造船に適した木材が近隣に豊富であることが最も重要な要素であった。優秀な南洋材は船喰い虫に強く船の寿命を長くした。27年、29年、38年などの長寿の船の実績がある。本国の船では10年も寿命がもてばよい方であった。また、入り組んだ河口の中に入り、外海に面しておらず、たやすく敵の攻撃の的にならないことも一つの理由であった。しかしこの点は、造船所そのものが海賊に目を付けられるようになり、度々の破壊的な攻撃を受け、利点には数えられなくなった。現地人の労働力が得やすい点も利点であった。しかし、この点も、スペイン本国のビスカヤ等の造船地に比べると、労賃が高かった。一般的に新造船は本国のほうが安上がりであったようであるが、寿命を加味すると分からないというのが一般的な見解である。しかし、いずれにせよ、この本国との比較が議論されるのは、本国での建造が考えられるバルロベント艦隊だけの話で、南海艦隊には本国での建造の選択の余地は無かった。17世紀後半で、バルロベント艦隊のハバナで建造された船の船殻の単価は1トネラーダ当たり30から50ドゥカードの間であった。例えば1681年に建造された600トネラーダの船は3万ドゥカード、550トネラーダの船は2.75万ドゥカードであった。これに対し、南海艦隊のグアヤキルで建造した船の単価は、16世紀末で79ドゥカードで、後には100ドゥカードを越えるまで上昇した。これらの単価には、帆柱を立て、艀装、武装する費用は含まれず、船殻だけの単価である。帆布、タールは現地で入手できたが、鉄製品（大砲も含め）は最後まで本国からの輸入に頼り、造船の工期上のネックとなるが多かった。なお、グアヤキルでの造船の場合でも、船殻は河口岸で造り、帆柱を立て艀装するのはプナ島ということが多々あった。それは水深のためである。難しい進水は浅瀬の川岸の船台から、未だ軽い船殻の段階で引きずりおろして行い、船が重くなって喫水が深くなる帆柱立てや、内甲板張り、艀装は水深の深いところで行った。船殻をカリャオまで曳航して、それらの工事、大砲の搭載をすることもあった。その場合、材木はグアヤキルからカリャオまで海上輸送された。

次にガレー船の使用についてであるが、運用上の問題がありながら、コストが安くつくことから、これを主張する副王も少なくなく、何隻も建造された。一番の問題は、漕手不足であった。現地人や奴隷にしても労賃が高くつき、人を集めることも困難であった。本国では囚人を使用した、それもいなかった。ペルー王国の副王が、メキシコの副王に囚人を送るように要

請することさえあった。南米沿岸では浅瀬も多く、その面ではガレー船は利点があったが、海賊を追跡して外海へ出ることは困難であった。建造されても港に繋留されるばかりで活躍したことはなかった。

三番目に、商船を徴発して、軍艦に改造することであるが、この方式は南海艦隊でもバルロベント艦隊でも重宝して使用された。一番の理由は、海賊が現れたり、船隊のコンボイ護送に使える軍艦が無かったりする時に、これ以外の方法が無かったことである。南海では、上記したように、海賊の侵入に油断をしていることが多かったのも、海賊の情報があると、慌てて現地にいる商船を購入した。バルロベントでも同じことは生じたものの、この艦隊の場合は、本国あるいはオランダなどで購入して持ってくるのが出来た。費用的にも商船は安かった。それは積荷を多くするために、船体が軽く造られたからである。軍艦に比して、肋材は細く、数が少なかった。船側の板張りも薄かった。これでは、必要な大砲を載せることが出来ず、改造、増強を行ったり、積載砲の数を少なくしたりせざるをえなかった。また船体の断面が、商船の方が丸みをおびて、操船性、航走性能が悪かった。官僚組織が運営する造船所（アスティジェーロ）や総合造船基地（アルセナル）で建造する軍艦より民間の造船所で建造した商船の方が安価に入手できた。スペインは 17 世紀初頭より勅令によって船を建造する際の要目を細かに定めた。これは本来軍艦の細目を決めたものであるが、商船にも適用された。それは商船を徴発した際に直ちに軍艦に転用するためであった。軍艦を建造する場合でも、国が直接管理して建造する方式と、建造請負人にマル投げ契約する方式とがあった。当然、給料が高く、官僚機構が工事を監督する直接管理方式の方が高がついた。しかし品質はこの方が確保された。請負方式では、たとえある程度の監督を国がするといえども手抜き工事が常套的に行われた。スペインの場合は何かにつけ、こうした悪習がはびこっていた。

バルロベント艦隊には南海艦隊には無い、船の調達上大きな問題があった。それは船を本国から調達する場合、購入のために本国に送付された資金が、他に流用されてしまうことである。船の調達以外のこと、よく起こったことは外国と戦争中にその戦費に流用されてしまったことである。しかし、資金そのものが流用されるよりも、一番よく生じたことは、送金した金で船が購入されてから、その船が他の用途に使われてしまうことであった。中でも、インディアス護送船団に使われることが多く、いったんはアメリカまで到着しても、その護送船団がスペインへ戻る際に、護衛艦として再びスペイン本国へ行ってしまうことも頻発した。結局はバルロベント艦隊の船としては使われないのである。本国での船の調達はスペインでの調達とは限らず、オランダ、フランスから購入することも多かった。そうして外国で調達する場合でも、本国の財務省がメキシコから送られてきた金を受け取って管理したので、こうした流用が可能なのであった。

4) 艦隊の財源

では、何故、上記したように流用と言い切れるのだろうか。所詮は税金として植民地で集められ王室の金庫に納まったものではないのか。本国と副王国との税制と徴税制度とにかかわる問題で、ここで深く論及するつもりはないが、割り切って言えば、アメリカ両副王国は、その王国内で住民に租税、売上税、関税、個別の物品税、等々をかけて副王国の収入とする。本国は副王国からパーセントで決められた税金、関税を徴収する。

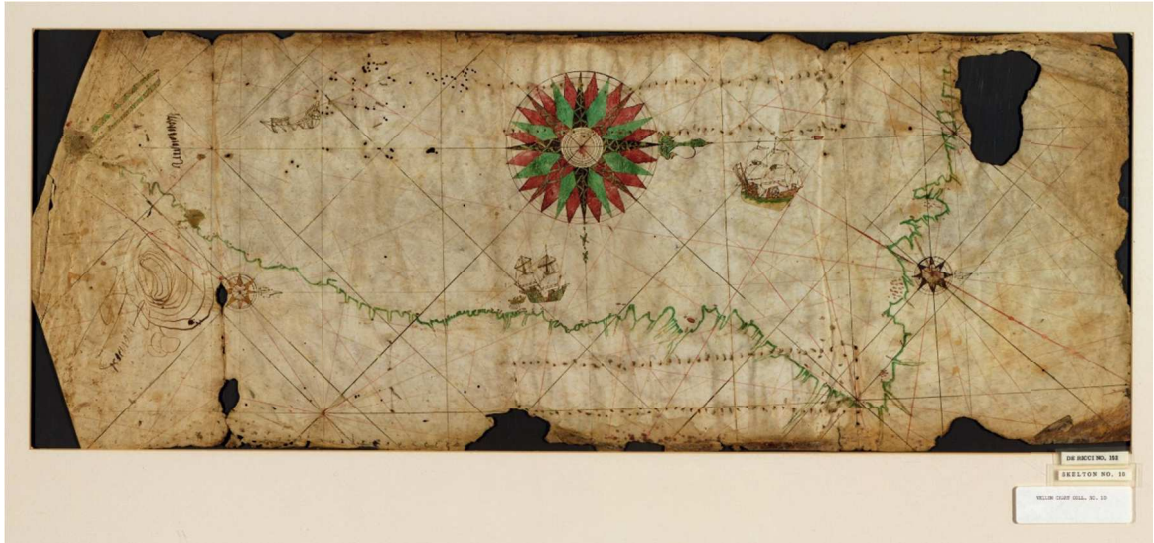
この時代の国の予算は、新たな出費要素が出てきても、それを本来の税収による一般歳費から賄うという概念はなく、そのための紐付きの税金を創出した。インディアス航路の護送船団の護衛費のために海損保険という税金（保険料）が創設された。南海艦隊の主要任務の一つはアリカ・カリャオ・パナマの銀の輸送船隊の護衛であり、インディアス航路の護送船団と似ていた。そこで同じ税が創設されたが、大きな違いがあった。インディアス航路の護送船団はインディアス商務館という国家機関によって運営され、個人はそこに或るパーセンテージの保険料を払えばよかった。しかし南海艦隊の場合は、護衛のための艦隊と契約したのは個人であり、国家もその一つでしかなかった。海損保険の変形と言えよう。最初は 0.5%からはじまり、1%に引き上げられ、2%となった。この海損保険の管理（徴税と出費）も請負制度とすることになり、国（副王国の管理部門）と商人の代表機関（商務館：コンスラード、領事館と今日訳されるが、この頃は商人間の商事裁判所、また商人間の利害調整機関であった）との間で入札が行われ、^{コンスラード}商務館が年間 8 万ペソという低値を付けて勝ち取った。この時、国は 10 万ペソであった。この海損保険では艦隊を維持することは無理で、副王国の国庫から金が引き出され穴埋めをした。これを「アポルタシオン」というが、著者は「持ち込み資金」と翻訳している。要は穴埋め資金で、必要とあれば、商人達が資金を集めて持ち込み資金を行うこともあった。

もちろん、経費節約も行われたが、その最たるものは、艦隊が越冬など長期の繫留中に、乗組員を解雇することであった。この制度のために、突然に海賊が現れても、艦隊を出航させる海員や兵士が集まらないことが日常茶飯事であった。

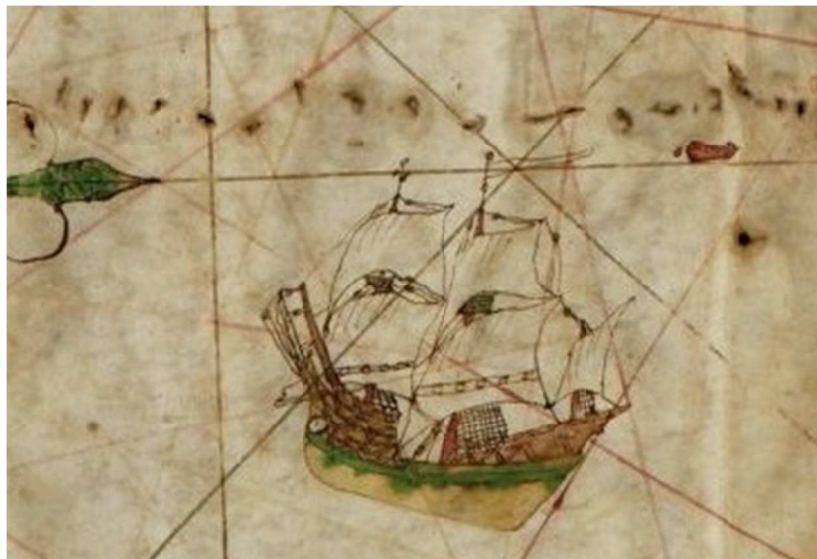
もちろん現代のように細かく管理されるわけではないし、また海賊の出現も海難もなかなか予測がつかず、帳尻は合わない。そうした帳尻が合わなくなると、用途を定めて特別な徴税が行われ、その用途に使用される。それが「シトゥアード」である。著者は「補助金」と翻訳している。税金はその時に取りやすいところから取った。酒、砂糖、没収船、染料の^{コチニール}胭脂虫、カカオ、タバコ、ワイン等々。インディアスの護送船団の費用が足りなくなると、メキシコのベラクルスからキューバのハバナに向けて^{シトゥアード}補助金が送金される。大金なので、バルロベント艦隊がその船の護衛にあたった。艦隊の船の購入にも^{シトゥアード}補助金が使われた。したがって、本国が、本来の本国の収入ではない副王国の金で、艦隊の船の購入費のための^{シトゥアード}補助金を使うことは勝手な流用なのである。しかし副王は国王の顔色を窺って、本国の王室に何も文句は言えなかった。

他の目立った補助金^{シトウアード}としては水銀の補助金^{シトウアード}があった。

英西戦争(1625~1630年)の間の1625年に、ペルーから60万ドゥカード、セビリヤの^{コンスラード}商務館から40万ドゥカード、^{アベリア}海損保険の1%アップで40万ドゥカード、そしてメキシコから31.3万ドゥカードの資金が、南海の大艦隊の船を購入するために予算化されて集められ、スペインに送金されたが1隻の船も送られて来なかった。ヨーロッパでの戦費に使われたのであろう。



ワシントンのナショナル・ライブラリー所蔵の古地図：メキシコ南部からペルーにかけての太平洋岸の16世紀末の海図と考えられている。未だ研究論文は発表されていないようである。



上掲の古地図の向かって右に描かれた船を拡大

5. 南海の海賊達

1) 南海最初のオランダ人達 ー同行したウィリアム・アダムスとヤン・ヨーステン

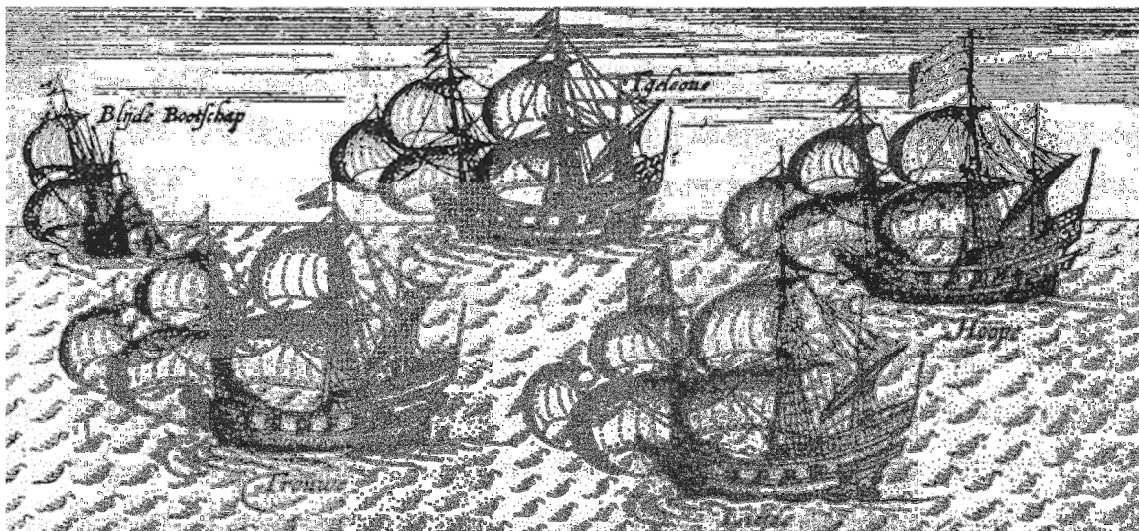
1585年にアントワープが陥落し、アムステルダムや北方の地方に多くの者達に移住したが、これらの人々の中には、当時のオランダの海外進出機運、そしてその機運に乗った多くの船の建造による海洋国家の誕生の波の中で、これから述べるオランダの最初の南海への海賊船リーフデ号の船長となるシモン・デ・コルデスとライド・ボースカップ号の船長となるセバル・デ・ウェルトがいた。こうした海外進出機運にのって、1594年にコルネリウス・ハウトマンがオランダ人として始めて喜望峯経由で東インドへの探検旅行を行った。こうした雰囲気の中で、すでに西インド諸島に出向き、商売あるいは海賊行為を行っている者とは別に、マゼラン海峡を西へ通過して商売を開拓しようとする者が現れた。それがヤコブ・マヒューとオリヴィエー・ヴァン・ノールトであった。両者の航海の時期は若干のズレがあるが、彼らの目的はほぼ同じものであり、一つのグループとして論じることが出来る。その目的というのは、最終的には、西回りで東インド諸島に向かうことであったが、その途次、スペイン領南米の太平洋海岸で交易のチャンスを探り、また将来の植民地の設営の可能性も探ることであった。現地インディオはスペイン人に反感を抱いているであろうと推測できるので、彼等と友好関係、ひいては同盟関係を結び土地を占拠する、その過程で武力行使が必要であればそれも辞さないというものであった。従って交易品として積載したのは、日用雑貨品、食器、布地の類であった。そして、アルケブス銃、マスケット銃、鎖帷子、剣などの武器をかなり持参した。これらの目的や持参品については、後日スペイン側に投降したオランダ人の船長や海員が白状した文書が残っている。硬軟どちらでも使い分けられる準備をしていた。

船名（英語訳）	トン数	大砲数	人員	司令官
ホープ Hoope (Hope)	500/600	28	130	ヤコブ・マヒュー Jacob Mahu
リーフデ Liefde (Charity)	300	26	110	シモン・デ・コルデス Simon de Cordes
ジェローフ Geloof (Faith)	320	18/20	109	ジェラルド・ヴァン・ビーユニンゲン Gerard van Beuningen
トゥラー Trouw (Fidelity)	220	18	96	ジュリアン・ヴァン・ボックホルト Jurien van Bockholt
ブライド・ボースカップ Blijde Boodschap (Glad Tiding)	150	16	56	セバル・デ・ウェルト Sebald de Weert
合計			501	

まず、マヒューの船隊であるが、1598 年 6 月に次の 5 隻がロッテルダムの南のグレー島から出航した。これらの船隊には、南海での経験がある英国人ピロートも何人か乗船しており、キャベンディッシュと世界周航をしたティモシー・ショーテンがいた。後に日本に到着することになるウィリアム・アダムスもピロートとして乗船していた。彼の兄弟トーマス・アダムスもいたが、南海へ到着後にチリ海岸でインディオに殺された。またウィリアム・アダムスとリーフデ号で日本に来航した最初のオランダ人ヤン・ヨーステンも参加していた。

ヴェルデ諸島に寄港して新鮮な食料を補給しようとしたがポルトガル人に拒否された。9 月 23 日に遠征隊のリーダーのヤコブ・マヒューが死に、シモン・デ・コルデスが後を継いだ。これによりビューニンジェンがリーフデ号の船長、ウェルトがジェローフ号の船長、ディルク・ヘリッツがブライド・ボースカップ号の船長となった。

西アフリカの現在の赤道ギネアのアンノボン島でフルーツなどを集めた後、1599 年 1 月に大西洋をブラジル側に横断し、現在のアルゼンチン沿岸を南下して 4 月 23 日に海峡の近くの、それ以降コルデス湾と呼ばれる湾に到着した。ここで 8 月 23 日まで越冬をした。厳冬の中で 120 人が死んだ。到着時にはまだ適切な風が吹いていたので、越冬せずに海峡を通過すべきであったと後になってコルデスを非難する者がいた。ウィリアム・アダムスもその一人で、手紙の中で「約 5~6 日間北東風があった。この間に我々は海峡を通過するのが良かった。」と書いている。その中にはヴァン・ボコルト船長もいた。彼の後は、司令官コルデスの兄弟バルタザール・デ・コルデスが継いだ。



マヒュー船隊の当時の銅版画

↑
リーフデ号

1599年9月3日に初めて5隻の船は南海に入ったが濃霧、荒波、そしてブライド・ボースカップ号の事故で船隊はばらばらになった。この時点での生存者は233~235人で、14ヶ月以上前の上前の出発時の半分以下となっていた。これらの船は二つのグループに分けられる。一つは最後に東インドに辿りついたホープ号とリーフデ号である。コルデス司令官が乗船するホープ号は、他の船がブライド・ボースカップ号の修理を手伝っている間に、チョーノス島でインディオ達が快く向かえてくれたので28日間を過ごした。その後11月7日にプンタ・デ・ラバピエ（サンタ・マリア島の本土の対岸）において、チョーノス島の経験から、インディオ達が友好であろうと考えて、23名と共に上陸を行った。

インディオ達は、スペイン人しか見たことがなかったので、全員を殺してしまった。この中にトーマス・アダムスが居た。船に残った者達は海峡を通過する前に落ち合う場所に決めていたサンタ・マリア島へ向かった。そこで、4日前にすでに投錨していたリーフデ号を見出した。

リーフデ号は南海を抜け出た後、チリ海岸のモチャ島で、現地人は友好的であろうとの考えのもとに、交易をするために、ヴァン・ビューニンジェン船長以下27名が上陸したが、大量殺戮されてしまっていた。

スペイン当局はサンタ・マリア島にオランダ船が居ることに気づき、偵察に船を差し向けた。これに対して、ホープ号とリーフデ号は交易の許可を願い出たが拒否された。両船はこれ以上の長居は危険と考え、11月27日に東インドに向かったが、航海中にホープ号は失われた。リーフデ号は東インドに到着、その後日本に航海し、豊後の国に漂着した。ウィリアム・アダムス（三浦按針）とヤン・ヨーステン（耶楊子）が乗っていた。二人のその後については、日本でよく知られているとおりである。

3隻の残りのグループの内ジェローフ号とトゥラー号は24日間海峡を抜けた辺りで悪天候に翻弄されていた。9月の末頃海峡の西の入口近くの湾に退避し、12月初めまでそこに留まったが、乗組員達は帰国の念に駆られ、合流地点のサンタ・マリア島に行かず、再びマゼラン海峡を東に戻って行った。しかし、トゥラー号は12月11日にジェローフ号を見失った。ジェローフ号は二度と誰の目にも触れることはなかった。12月16日にマヒュー船隊の後を追うように、オランダを発っていたヴァン・ノールトの遠征隊と出会った。しかし、ヴァン・ノールトは糧食をトゥラー号に分けることに同意しなかったので、1600年1月21日にデ・ウェルトは帰国を決断して故国に向かい、7月13日に出発地のグレー島に、マヒュー艦隊の5隻の内唯一の船として乗組員36人と共に帰り着いた。

ブライド・ボースカップ号は、海峡の西の入口で南に流され、南シェットランド諸島あるいはグレアム・ランドを目にした後、北上してチリに戻ることが出来た。疲労困憊したディルク・ヘリッツ船長と22名はバルパライソで白旗を掲げてスペイン当局に降伏した。3名は1602年にスペイン向うために、パナマへ行く船に乗せられたことが記録されている。船大工は貴重

な技術保持者として留め置くべきことを書いた書類が残されているが、3 名以外の者がどうなったかわからない。

マヒュー船隊がグレーを出航した数日後にオリヴィエ・ヴァン・ノールトがモーリス号を指揮して、アムステルダムから来るヘンドリック・フレドリック号とエーインラフト号と落ち合って、スペイン領の南米西岸に向かうべくロッテルダムに向かっていた。その後合流を果たして、南米に向けて最終的に出航したのは9月13日であった。

船名（英語訳）	トン数	大砲数	司令官
モーリシャス Mauritius (Maurice)	250	24	オリヴィエ・ヴァン・ノールト Olivier van Noort
ヘンドリック・フレデリック Hendrick Frederick	300	25/28	Jacob Claesz van Ilpendam
ホープ Hoop (Hope)	50		Jacob Jansz Huydecoper
エーインラフト Eendracht (Concord)	50		Pieter Esaisz Huydecoper

途中イギリスのプリムスで英国人ピロート、メリスを一人乗船させた。アフリカ西岸で新鮮な食料を積もうとしたが、マヒューと同様にポルトガル人に拒否され、12月10日にギネア湾に強力な戦隊を上陸させたが、ピロートのメリスが殺された。1599年2月9日にブラジルのリオデジャネイロ湾に入ったがポルトガル人と戦いになり、食料も水も入手出来なかった。マゼラン海峡の近くまで行かない所で、越冬の場所をいろいろ探したが、結局は上手く行かず、海峡の近くのプエルト・デセアードとビルヘン岬との近くで越冬し、大量のペンギンを捕獲して飢えを凌いだ。11月24日に海峡への進入に成功したが、ヘンドリック・フレデリック号は他船とはぐれ、別の道を歩むことになった。3隻が南海に入ったのは2月末であった。出発時の40%ほどの人員が失われていた。1600年3月21日にヴァン・ノールトはモチャ島に上陸し、インディオと平和裏に物々交換を行った。3月25日に南海に侵入したオランダ人を偵察しにこの海域に来ていたスペインの船ブエン・ヘスース号を捕らえた。この船からマヒュー船隊のクルデス達の運命を知った。ヴァン・ノールトはバルパライソに向けて北上しつつ3月28日に2隻の船を燃やし、ブエン・ヘスース号を捕獲した。同船は、捕まる前に積んでいた黄金を海に捨てた。4月1日にウアスコで、待望の新鮮な食料を積み込むことが出来た。しかし、チリとペルーでは交易の機会を見つけることは出来ず、スペイン人が自分達を躍起になって探している情報が多くなったため、東インドに行く決断を固め、東インド諸島に向かった。この時、ブエン・ヘスース号のピロート、ファン・サンドバルを太平洋の航海に使うため連れて行ったが、お役ご免になると彼を海に投げ入れて殺した。モーリシャス号は1600年12月14日にフォーチュン諸島で、スペイン側の旗艦サン・ディエゴ号を沈めた。（この船は商船であったサン・ア

ントニオ号を徴発して名前を変えたもので、1992年に沈船が多数の陶磁器と金製品と共に発見された。) エーインラフト号はこの海戦で敵の手中に落ちた。ヴァン・ノールトとはモーリシャス号で1601年8月26日にロッテルダムに帰り着いた。当初からの遠征隊員約250人の内生き残ったのは45人であった。この世界周航は第4番目、オランダ人としては初めてのものであった。(①マゼラン、②ドレイク、③キャヴェンディッシュ)

ヘンドリック・フレデリック号は、他船と落ち合う場所であったサンタ・マリア島にゆき、スペイン船を捕らえた。その後、5月2日にコンセプション、そして6月18日にアリカで小競り合いを行ってからパナマ湾に向かった。その後東インド諸島に行き、テルナテ島で座礁した。乗組員は助かり、その後1602年に創立されるオランダ東インド会社で働くこととなる。

マヒューとヴァン・ノールトの遠征隊から、スペイン以外のヨーロッパ人が交易あるいは植民のために南海へ入り込むことはカリブ海に比べてずっと困難であったことが分かる。スペインに併合されていたポルトガル人の敵対が強く、マゼラン海峡に入る前に新鮮な食料と水を確保することに多大な苦勞を強いられた。また、チリにおいて現地人の反スペイン感情をあてにできると考えていたが、さほど単純なものではなかったことが大きい。南海に到着するのに、マヒュー船隊は14ヶ月ちょっとかかり、生存率は48%、ヴァン・ノールト船隊はほぼ18ヶ月で59%という計算がある。その差は越冬の仕方によることが大きいようである。

この二つのオランダの船隊が南海に到達した時の南海艦隊の動きは次のようであった。6隻のガレオン船と8隻の小型船が南へ偵察に出されたが敵と遭遇することはなかった。ディルク・ヘリッツがバルパライソで降伏した際にオランダ側の船隊の目的と詳細を把握することが出来た。1600年1月1日にガブリエル・デ・カスティーリャの指揮下で2隻のガレオン船と1隻のパタチェ船で300人の男達が、また13日にフアン・デ・ベラスコ將軍の下600人以上の乗組員で4隻のガレオン船と1隻のパタチェ船からなる艦隊がピスコ付近のサンガリャン岬に向かったが、オランダ人達は北へ移った後であった。パナマへ銀を送る時期が近づいたので、全艦隊がカリャオに戻り、銀の護送とは別の艦隊を組んでカリフォルニアまでオランダ人を追いかけたが無駄で、カリャオへの帰途に旗艦が沈没してしまった。南海艦隊はこの後もいつも、銀の護送船団と南への偵察に艦隊を2分しなければならず、護送船団を重視するあまり偵察艦隊が疎かにされるディレンマに悩んだ。このオランダ人達の出現により、年の内の何ヶ月間かはチリ海岸での偵察を維持することが決められ、1609年まで続いた。しかし、ヴァン・シュピールベルゲンが1615年に南海に現れた時、経費削減の本国の要請により、この常時の偵察艦隊はいなかった。

2) ヴァン・シュピールベルゲンによる南海艦隊の撃破

マヒューとヴァン・ノールトの遠征の頃に、既にオランダ議会は、通商においてオランダが大きなシェアを達成するという観点から、類似した商業的な事業を合併するか、あるいはそれらの努力をコーディネートすることを加速し始め、1602年に東インド会社を創設した。この会社は、喜望峯経由の東方へは21年間の独占権を付与したのに対して、西へは10年間、カリブ海、ガイアナ海岸、そしてブラジルに限られていた。

会社創立後直ぐの何年か、オランダの南部からの避難者で、西インド諸島におけるオランダの拡張計画案の提出者、そして一般的に「戦争派」と言われたグループの指導者であったウィレム・ウセリンクスと、スペインとなんらかの形の取り決めを結ぶことを目指す「平和派」を指揮したヨハン・ヴァン・オルデンバルネフェルトとの間で主導権争いがあった。ウセリンクスは、新世界において単に貴金属の富を奪うよりも、肥沃な土地にオランダの植民地を開発すべきであるという理論を擁護していた。植民地で価値ある商業的収穫物をヨーロッパの市場のために生産して本国に輸入し、本国の加工品の新たな販路を植民地で見つけるという重商主義的な思想を持っていた。熱心なカルヴァン主義者であり、スペイン人に対する武装した同盟のための確固たる基礎の役割をするかもしれない現地人とオランダ人との信頼の結び付きを創り出すことを希望して、現地人に改宗を勧めることになる。既に記述した二つの冒険的事業からわかるように、その計画はスペイン人あるいはポルトガル人の植民地を奪うことではなく、それらの地域、例えばラ・プラタ河の南とチリの南部に未だ設営のために空いた場所があるかどうかを見定めることであった。しかしながら次第に、ウセリンクスと彼の支持者達は、国庫から紛争に使われるコストの負担を取り除こうとし、またアメリカの産物はスペインとポルトガルの港における方が安く手に入ることを指摘する法律顧問^{ランドアドボカート}ヴァン・オルデンバルネフェルトに率いられる強力なスペインとの和平支持者達に直面させられることになった。激しい議論の結果、1609年にスペインとの12年平和条約が締結された。スペインに面と向かって衝突することにならないよう、慎重な言葉使いではあるが、条約は、新世界におけるスペインの保有地を守る努力をする一方、東インド諸島におけるオランダの拡張を暗黙裡に認めさせるものであった。従って、それはウセリンクスによる最も野心的な提案を阻止するものに等しかった。しかしガイアナ海岸とブラジルのような地域におけるオランダの活動を完全に排除するものではなく、具体的には1613年頃以降に、新世界でのオランダの活動に対する提案をウセリンクスが進め続けることを思いとどまらせることはしなかった。^{スターテン・ヘネラール}オランダ議会も、短期間問題を放置したが、西方における関心を新たに示し始め、ヴァン・シュピールベルゲンの遠征隊が南海に航海することになった。なおオルデンバルネフェルトは1619年にオラニエ王子マウリシオ・デ・ナッソーに反逆罪で処断された。

多分当時の新しいオランダの諸海事事業が大きく結びついたことを反映して、新世界のスペ

イン領に侵入する真新しい活動は、「偉大なる^{スターテン・ヘネラール}オランダ議会と皇太子殿下」から正式に拝命したものであり、マゼラン海峡を通過しての通商の独占権を行使することを明らかに望んでいる東インド会社からの資金援助を受けていた。こうしたスポンサーを得て、1614年の最初の何ヶ月かの間に一つの船隊が集められた。リーダーは、1601年と1604年に喜望峯経由で東インド諸島に航海し、その有能性と確固とした信念が確かめられていたヨリス・ヴァン・シュピールベルゲンであった。船隊の構成はつぎの通りで、700人が乗船していたが、海員と兵士はほぼ半々であった。大部分がオランダ人であったが、ドイツ人とフランス人も参加していた。

船名（英語訳）	トン数	大砲数	司令官
グート・サン Groote Sonne (Great Sun)	600	28	ヨリス・ヴァン・シュピールベルゲン Joris van Spielbergen
グート・マンネ Groote Manne (Great Moon)	600	28	Claensz Marten Thovling
モルジェンスターレ Morgensterre (Morning Star)	350	24	Maerten Pieterssen Cruyck
アエルス Aelus	350	24	Job Cornelissen
メウエ Meeuwe (Gull)	60	8	
ヤジェル Jager (Huntsman)	60	8	

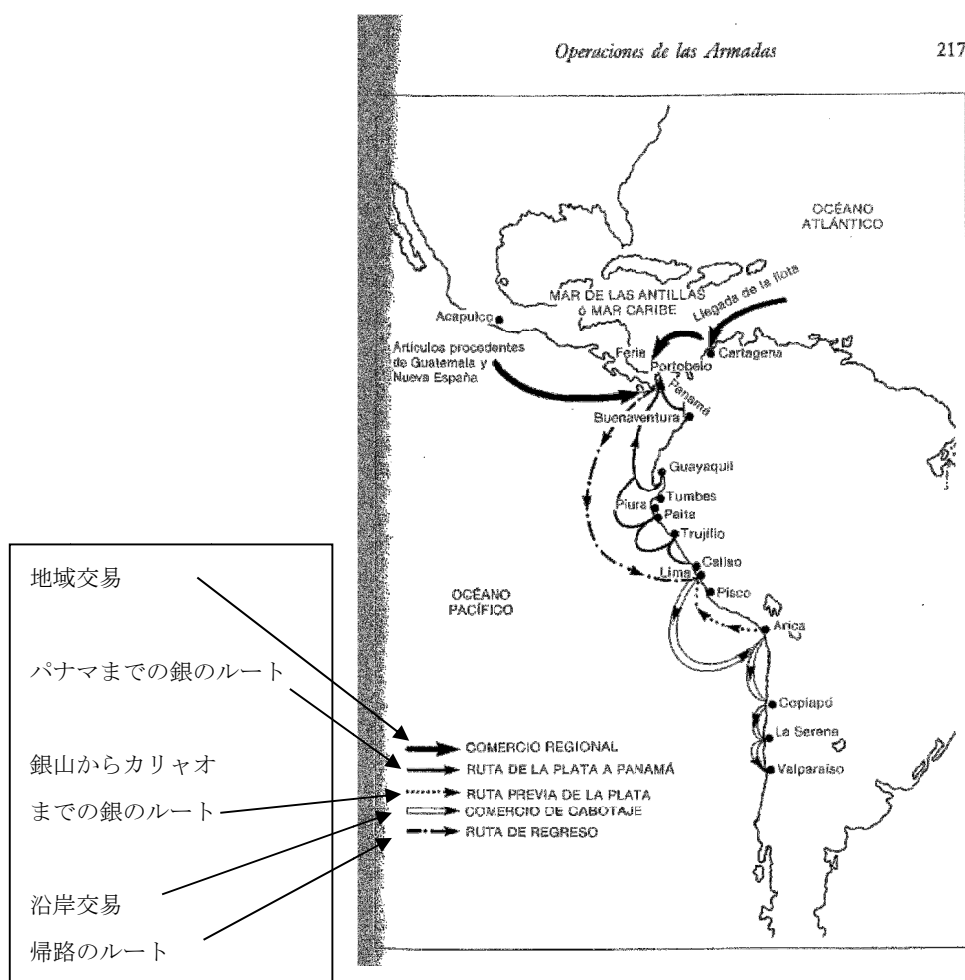
この船隊は1614年8月8日にアムステルダムの特セル島を出航した。カナリア諸島を通過し、12月13日にブラジル本土を望見し、今日のサントスのサン・ヴィセンテでポルトガル人と衝突した。同地を1615年2月4日に立出、4月2日に、反乱の兆しがあったメウエ号を除く5隻がマゼラン海峡に入り、4月16日にコルデス湾に集結することが出来た。5月29日にサンタ・マリア島に投錨したが、海岸にはスペイン兵が現れ、湾に居たスペイン船が逃げ出し、オランダ人の来襲を本土に告げた。5月30日にスペイン側からフアン・コルネッホが夕食の招待状を届けてきたので浜に向かったが、スペイン人達が待ち伏せしていることが分かり、船に引き返した。コルネッホから、副王モンテスクラロが既に侵略の恐れがある警告を受け取っていたので、甥のロドリゴ・デ・メンドーサを2隻のガレオン船と1隻のパタチェ船に500人以上の乗組員と大砲42門を乗せた南海艦隊の司令官として1614年12月にカリャオから派遣していたことを知った。メンドーサは敵を発見できないまま、5月13日にカリャオに戻っていた。

ヴァン・シュピールベルゲンは6月12日にバルパライソに入港し、そこに居た1隻を捕獲したが、その乗組員達は積荷の乾パンと小麦を捕まる前に燃やしていた。町のスペイン人達は

住居に灯を放って逃げた。

地図 2

南海における諸航路



7月2日アリカへ入港したが防衛体制が敷かれていた。しかし、スペイン側は元々は7門あった大砲の良いものは銀船隊に持って行かれてしまっており、古くて射程の短いもの3門が残されているだけであった。この状況は、ペルーの全ての二次的な港に同じことが言えた。期待したカリャオへ向かう銀船隊が居らず、失望したヴァン・シュピールベルゲンは早々にアリカを引き上げた。

ペルーの副王モンテスクラロ侯爵はオランダ人の侵入について早くから警告を受け取っていたが、バルディビア沖での敵船発見が誤報であったこともあり、国王に対して、南海艦隊が居れば、オランダの艦隊など、なんのそのという高をくくった手紙を出していた。しかし、手持

ちの艦隊全てがオランダ艦隊に立ち向かえばその可能性もあったであろうが、現実には銀をパナマに送るために半分の戦力を割いてしまっていたのであった。7月17日の首都リマの港カリャオに居た南海艦隊の構成はつぎの通りであった。この表の武装人員は海員ではなく、兵士であったの、オランダの約倍に近い戦力であったが、大砲はオランダ側の約100門に対して半分強であった。スペイン側の兵士は、火器の扱いに慣れない者が多く、またクリオーリョなど混血児が多く戦意は低かった。

当時の南海艦隊の構成

船名	トン数	船長	武装人員	大砲数
国王のガレオン船				
ヘスース・マリア	400	ロドリゴ・デ・メントーサ	150	22
サンタ・アナ	250	ペドロ・アルバレス・ブルガル	130	14
商船				
カルメン		デイエコ・デ・サラヒア	100	8
サン・ディエゴ		ハロモ・デ・ペラサ	100	8
ロサリオ		ニコ・デ・アヤラ	60	4
サン・アンドレス		ファン・デ・ナハラ	40	0
サン・フランシスコ		ファン・アルセ・デ・アルベントリン	40	0
合計			620	56

ヴァルメイでのヴァン・シュピールベルゲン艦隊の当時の銅版画



ヴァン・シュピールベルゲンは17日の夕方にピスコとカリャオの間のカニエテの沖で南海

艦隊に遭遇した。戦闘の準備が始まり、非武装のサン・フランシスコ号が沈められ、90名の命が無くなった。スペイン側は、船隊が一体となっているように夜通し各船に火を灯させていたが、翌18日の日が明けると、スペインの船隊は方々に散らばってしまっていた。8時間の戦闘が火蓋を切ったが、司令官メンドーサの意に反して、旗艦のヘスース・マリア号が白旗を掲げ、乗組員は船を放棄して脱出し、ピスコへ逃げってしまった。^{アルミランタ}副司令艦サンタ・アナ号は砲火を集中され、船長のアルバレス・ブルガルは降伏を勧告されたが断り、船と共に沈んだ。戦闘に参加しなかった商船は現場から逃げ出しており、カルメン号とロサリオ号はピスコに逃げ込み、サン・アンドレ号はカリャオに辿りついた。スペイン側の死者は400~500人、オランダ側は40人が死亡したに過ぎなかった。

艦隊敗北の知らせを受けた副王モンテスクラロは、オランダ船隊が嵐のためにカリャオ湾に7月20日まで近づけないでいる間に、町が防衛を固めているように見せかける偽計しかないと考え、その準備をした。副王は戦いに慣れない約300人と多くの学生を集め、ラッパや楽器を鳴らさせ、大声で伝令に叫ばせた。この有様にヴァン・シュピールベルゲンは大兵力が備えていると勘違いした。また、スペイン側には砲撃の技術を持つ者が他にいないので、フランシスコ派の僧侶が発した大砲の1発がオランダ船ヤジェル号の近くに落下し、オランダ側を驚かした。ヴァン・シュピールベルゲンは日誌に騎兵8部隊と4,000人の歩兵と対峙したと書いている。カリャオでの滞在を伸ばしても事態は好転しないと考え、7月26日に帆をあげ、ウアウラとウアルメイに立ち寄り、最後に8月8日にパイタに寄ったが代官フアン・コルメネーロ・デ・アンドラーデが守っていたが、部下達は逃げてしまい、町は焼かれてしまった。ここはマイナーな港であるが、カリャオとパナマ間の銀船隊の重要な寄港地であったので、パナマから戻る船隊を待つて、パイタに2週間滞在した。その船隊にはモンテスクラロの後の副王となるエスキラーチェ王子がいることをスペイン人の捕虜が白状していた。しかし、8月9日にパナマを出帆していたエスキラーチェは海上作戦に精通しており、敵の手がパイタに及ぶ恐れを感知して、9月9日にグアヤキル湾の北のマンタで上陸し、陸路をリマに赴いた。その間、代官の妻ドニャ・パウラはスペイン人の捕虜を新鮮な食料と交換するように懇願し成功した。ヴァン・シュピールベルゲンは彼女の「美しさ、優美さ、そして思慮深さ」に感動し、町を焼いたことを詫び、ピロート等30名は手元に残したが、多くの病人と虚弱の捕虜を解放した。

その後、ヴァン・シュピールベルゲンは南海を北上し1615年10月10日にアカブルコ湾に入った。

エスキラーチェによって指名された軍事顧問グループによってペルー副王国の防衛の長期的な活動の三つの進路が、答申された。第一は、三つの要塞を、これら要塞からの十字砲火が投錨中の船を守り、敵対勢力に上陸を思いとどまらせるようにカリャオの海岸線に並べて築造すること、第二は艦隊をカリャオと銀をパナマへ輸送する小艦隊とで分割すること、海員達には

恒久的な形で給料が払われること、各部隊が 100 名の兵士を有する 5 部隊の創設、そして最後に、1621 年の彼の召還時期までに船隊を建造し、かつ拡張して 4 隻のガレオン船、2 隻のパタシェ船、2 隻のランチという構成にすることであった。海上での作戦行動のパターンをそれまでに確立するが、それは船隊の半分（2 隻のガレオン船と 1 隻のパタシェ船）は銀と共にパナマへ航海し、その間第二の似たような船のグループが、防衛力として副王国の心臓部に留まり、カリヤオとアリカの間で運用されるというものであった。より強力な船隊の必要性のみが、新旧両副王間の防衛計画で唯一意見が合った点であったように思われる。エスキラ・チェ新副王の行動はヴァン・シュピールベルゲンのケースの繰り返しを恐れた者達の確たる後押しを勝ち取ったとはいえ、費用がかかることであるので、とりわけペルーでのオランダ人に対する心配が小康を保った時には、彼は国王とインディアス審議会のメンバーによって厳しく咎められた。本国より人が副王国に派遣され、王室聴聞院^{レアル・アウディエンス}と他の国王の役人達に対して、銀の収益の低下傾向が見られるが、それは新防衛策に起因することを警告した。

3) オランダ人のルメールとスハウテンによるホーン岬の発見

1619 年頃、反逆の罪でのヴァン・オルデンバルネヴェルトの処刑とナッソーのモーリシャス（マウリッツ）王子が力を持ったこと、そして軍国主義的カルヴァン主義者の「戦争派」によって特色付けられるように、国民感情に新しい風が吹き始めていた。1621 年 6 月 3 日にスペインとの平和条約期限が終わるや否や国民会議^{ステーツ・ジェネラル}は新しい西インド会社に特許状を付与した。以前からある姉妹組織の東インド会社(VOC)と明らかに似てはいたが、新会社はその目的において優れて好戦的であり、それ故にウセリンクスの、新世界において、目的として通商と植民の設営を探索する会社という概念が当初より予想された。平和条約満了に続き、西インド会社は、スペインに対し、その海外の領地の資源を奪おうとして、攻撃に打って出た。一つのやり方は、新組織がライセンスとコントロールの下で、個人にスペイン人の設営地と海運に対して利益の上がる襲撃を行って反スペインの機会を提供するものであった。

新会社は、東インド会社の定款には具体的に示されていないテリトリーの 24 年間の独占権を付与されたが、これらのテリトリーにアメリカの東と西、北と南を含んでいた。1624 年 5 月のブラジルのバイアへのオランダ人の攻撃と翌年のイースターまでの占拠をもってして、ブラジルがイベリア半島諸国への挑戦の最も好ましい場所として選ばれたことが明らかになった。

1621 年に西インド会社は国民会議^{ステーツ・ジェネラル}からの、現在の我々がジャック・レルミットのナッソー船隊として知っている、VOC が既にかかなりの金額を投資しているプロジェクトへの誘いを断った。拒否した理由のある部分は会社法人の資金不足によるものであったが、結果的に利益が上がらないことを恐れたからでもあった。

レルミットが航海する数年前、VOC 内において、専ら商業的活動を行うものであるという考

え方の者に対し、イベリア半島勢力に攻撃をしかけて拡張を探求することを要求する者は、喜望峰とマゼラン海峡に対する東インド会社の独占権を犯さない南海への新しいルートの探索を産み出そうとしていた。その先頭に立った者はイサーク・ルメールで、アントワープの商人であったが、スペインによるアントワープの陥落後アムステルダムに移り、その市民となった。VOC の最大株主であったが、或る事件のために同会社と不和になり VOC を離れた。そして VOC によるマゼラン海峡と喜望峰通過の独占権に抵触しない道を探すために、かねてから南米南端で大西洋から太平洋への通過路の可能性を考えていたので、「南方大陸会社:Austraalse Compagnie」を設立し、長男のヤコブを南米南端に送り、ホーン岬を発見させた。1609 年にはヨリス・ヴァン・シュピールベルゲン等とともにフランス王アンリ 4 世に招かれ秘密裏にフランス東インド会社設立の相談をしているが、同王が暗殺され挫折した。その後はヨーロッパ海域の通商に専念した。22 人の子供があり、その内の一人マクシミリアンは 1641 年に出島の VOC 初代商館長となった。イサーク・ルメールは長男ヤコブに、彼の親戚で、支援者である経験豊かな航海長の主席ピロートのウィレム・コルネリスゾーン・スハウテンを同行させた。船はエンドラフト号とホールン号の 2 隻であった。ヤコブはその後東インド諸島で死ぬことになる。

1616 年 1 月 25 日頃マゼラン海峡の入口を通り過ぎた後、ヤコブ・ル・メールとスハウテンは第二の海峡（彼等はこれをル・メールと呼んだ。正確にはこの時点では海峡かどうか分かっていなかったなので海峡とは名づけていない）、ティエラ・デ・フエゴと彼等がシュターテン・ラントと呼んだ間を横切った。4 日後に、雪に覆われた丘状の陸地を見たので、これを、北部オランダのスハウテンの故郷の町の名前をとってホールン（Hoorn）と名づけ、南海に航行していった。

アメリカの南海海岸のスペイン植民地へのアクセスの意味を伴った地理上の知識の重大な進展は、ヴァン・シュピールベルゲンが鳴らした警鐘の直後にやって来て、スペインとしてはこれに直ちに応答する必要があった。スペイン人ピロートと海員にマゼラン海峡の航海に熟知させるための情報を集めるために小遠征隊を整えるという決定が 1616 年に既に届いていた。それは、イサーク・ルメールが、新ルートは VOC の独占に抵触していない事を世に知らすために直ちに発見の公開を行っていたからである。なお、スハウテンはヴァン・シュピールベルゲンと共にオランダに戻っていた。1618 年と 1619 年のスペイン人、バルトロメーとゴンサロ・ガルシア・デ・ノダルの航海はル・メール海峡、即ちホーン岬を通過して、マゼラン海峡経由大西洋に戻り、最初のティエラ・フエゴの周航を完成させた。彼等は、陸地、現地人、花、動物系、そして潮流の正確な観察結果と具体的な航海指示を伴って戻り、1621 年にマドリッドで出版された。

地図3

バルパライソと
サンチャゴ
ファン・フェルナンデス諸島

サンタ・マリア島

モチャ島

バルデ・イビア

地図4

チロエ ポルト・ヘーロ

フエルト・デ・セアール パナマ

マゼラン海峡

マンタ

ティエラ・デ・フエゴ グアヤキル

プナ島

シュターテン島

ホーン岬

トルヒーリョ

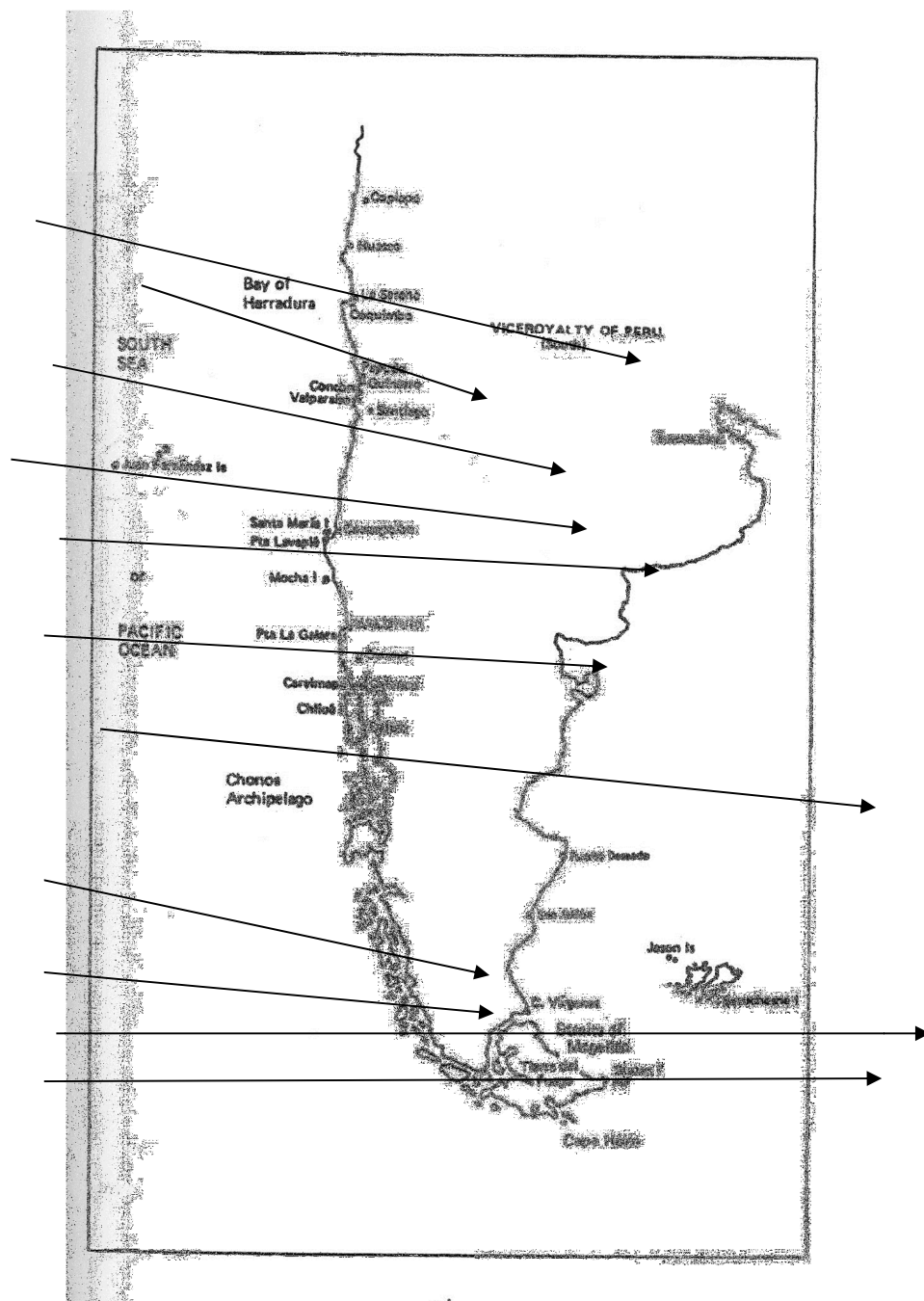
ウアルメイ

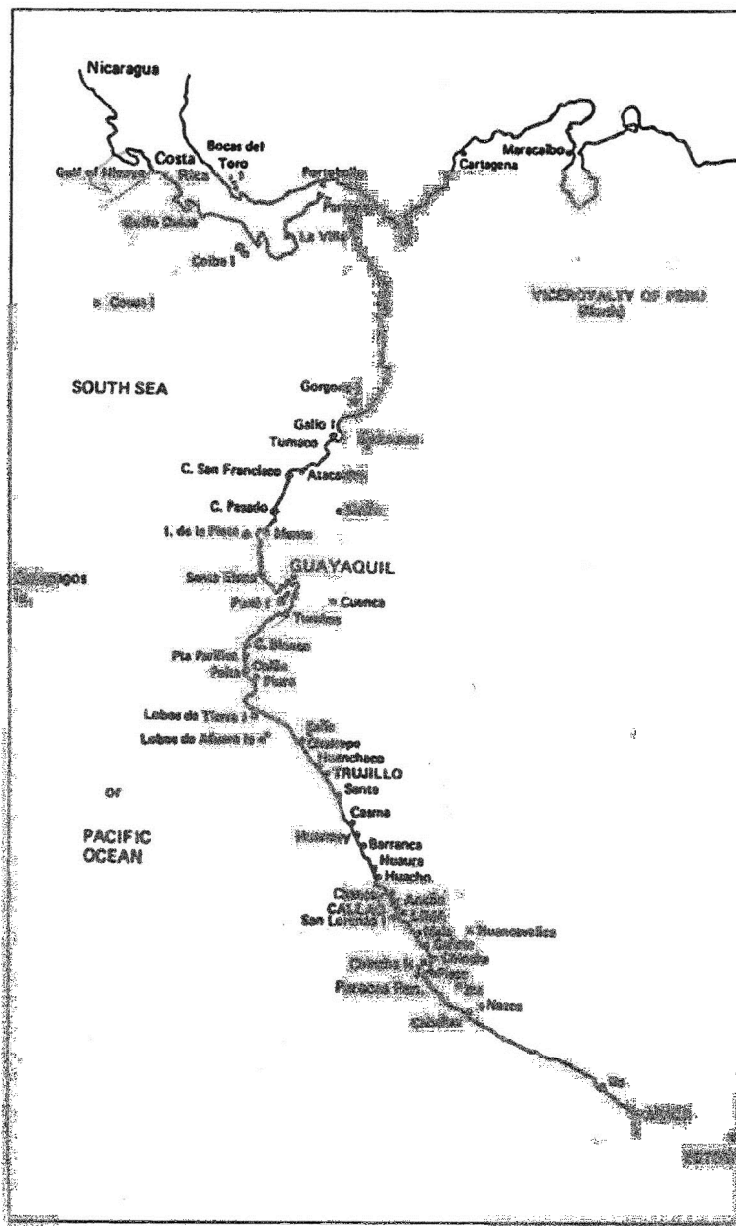
カリャオとリマ

マラ

カニエテ

アリカ





4) ジャック・レルミット率いるナッソー船隊のカリヤオ封鎖

1623年の春頃、西インド会社は参加しなかったが、ナッソーのモーリシャス王子の名の下に、東インド会社に指名された3名の委員によって、次のような、今まで南海に入った中で最強の11隻の船、1,637人の人員、294門の大砲を有する船隊が整えられた。

船名（英語名）	トン数	船長	人員	大砲
---------	-----	----	----	----

アムステルダム市から				
アムステルダム Amsterdam	800	Admiral Jacques l'Hermite 及び Captain Leendert Jacobs Stolk	237	42
デルフト Delft	800	Vice-admiral Hugo Schapenham 及び Captain Cornelis de Witte	242	40
アーレント Arent (Eagle)	400	Captain Meyndert Egbertsz	144	28
エースウィント Haeswint (Greyhound)	60	Captain Solomon Willemsz	20	4
ゼーランドから				
オラニエ Orangien(Orange)	700	Rear-admiral Johan Willemsz Verschoor 及び Captain Johansz Quirguen	216	22
ロッテルダムから				
オランダディア Hollandia(Holland)	600	Cornelis Jacobsz: counsellor to the admiral and Captain Adrian Tol	182	34
モーリシャス Mauritius(Maurice)	560	Captain Jacob Ariaensz	169	32
ホープ Hoop(Hope)	260	Captain Pieter Harmensz	80	14
北オランダから				
エーンドラフト Eendracht(Concord)	600	Captain Jan Ysbrantsz	170	32
ケーニング・ダヴィド Koningh David (King David)	360	Captain Jan Thomasz	79	16
グリフォン Griffon(Griffin)	320	Captain Pieter Cornelisz Hardloop	78	14

1632 年 4 月 29 日にグレー島を出航し、翌年の 2 月 2 日にル・メール海峡に入り、2 月 6 日にホーン岬が見えた。数週間の嵐と強風の後、3 月 28 日にチリ海岸が望見された。フェルナデス諸島に集結し、アリカで銀の船隊を襲う計画が練られた。この頃より司令官のレルミトは体調を崩し始めており、船隊の実質的な指揮は副司令官のシャペンハムに任せられた。

5 月 7 日にマラの沖で敵船を見たとの決定的な証拠を受け取って、副王グアダルカサルは個人の銀と商品の第 2 回の発送を許すことが安全であるかどうかを確かめるためにカリャオから

2 隻の小船^{チンチョーロ}を派遣した。不幸にも、これらの船の 1 隻の船長マルチン・デ・ラレアがオランダ船隊の真中に入り入れてしまい、逃げる事が出来なくなった。彼とその黒人乗組員達の尋問内容は差がないが、ラレアはオランダ人達の注意を、少し前に出航したばかりの銀船隊から逸らすために、同船隊は約 2 週間前に出立したと嘘をついた。これに対して黒人達は 3 日前と言った。そこで両者は同席させられ、どちらが正しいか試されたが、船長はトレセ(trece:13)と言うところを、黒人がトレス(trez:3)と言ったように聞こえた、発音上の聞き間違いであると弁明した。

オランダの船長達は予定通り銀船隊を追うか、ペルー海岸に狙いを変えるか、ディレンマに陥ったが、結局カリャオの封鎖をすべきという意見に傾いた。銀船隊はすでに逃げおかせており、パナマの砲台に守られて荷揚げが出来るであろうということと、オランダ側には北方海域に詳しいピロートが不足しているという理由からであった。この決定は、カリャオとリマの防衛は比較的弱いという小船^{チンチョーロ}の黒人達から得た情報で補強された。ラレアは、防衛は準備が出来ており、その人数は 6,000 人だという嘘をついた。しかし、オランダ人達は 4,000 人の黒人が彼等の側に寝返るであろうと信じた。また、オランダ人達は、ペルー艦隊の旗艦ヌエストラ・セニョーラ・デ・ロレート号が個人の銀の第 2 回の出荷分と共に港に居て、出航のチャンスを待っていることにも気づいていた。そしてナッソー船隊は、上陸して港と首都の略奪、旗艦への攻撃、そして商船の通商の全体的略奪という三つの可能性の有る目的を心に抱いてカリャオへ向けて航行した。

5 月 10 日の上陸の最初の試みの場所として、リマを直接攻略できると思われるカリャオの港から 2 マイルほど北のボッカネグラをオランダ人は選んだ。今や当初の人員(1637 名)の 20 パーセント以上が減って、トータルで約 1,300 名となった中の 800~900 名が約 17 隻のランチに乗って浜辺に向かったが、強い潮流のために計画を断念せざるを得なかった。同日、時間が経ってから第 2 回の接近が行われたが、この頃までにスペイン人は狙われた場所に大砲を持って行くことが出来ており、攻撃を押し返し、オランダ側に約 20 人の死者を生じさせた。

5 月 11 日の夜遅くに、再びボッカネグラの近くで慎重とはいえない行動を取り始め、主に湾内に投錨していた 50 隻ほどの船に突っ込んだ。これらの船の大部分は、海岸の谷間の農産物を運んだり配ったりする小船であったが、ペルー艦隊の旗艦はこれらの船の間にいた。この新たな攻撃は、新しく出来ていた海岸の砦からの砲火に打ちのめされ、目立った損失を与えることも出来なかった。9 隻ほどの商船に火がつき、すぐにオランダ船隊に向けて漂い始め、船隊は逃避行動を取らざるを得なかった。

カリャオとリマの防衛は手薄だと思って到着したのに、今や最初の出撃で撃退されてしまったことに乗組員達は大きな失望を味わった。事實は、彼等が怖がって引き下がるほど副王の防衛の準備状況はたいしたものではなかった。副王は早くに差し迫ったオランダ人が南海へ進入

する警告を受け取っていたが、最初の望見が間違いであったことを知ると、集めていた増強戦力を解散してしまった。そればかりか、最近パナマへ出航したばかりの銀船隊は、最高に武装し訓練した者達を乗せ、カリャオを手薄にさせていた。今回の侵入に対し、港が本土で防衛体制を敷いていたのは、1616年と1617年にエスキラーチェによって築かれた二つの砦で、その一つは7門の大砲を有して海岸線の中央にあり、もう一つは9門の大砲を有して北の海岸線にあった。これら二つに加え、南にエスキラーチェの第3番目のプロジェクトとして、基礎工事以上には進んでいなかったものを、副王グアダルカサル侯爵はもう一つの砦として加え、8門の大砲を備えた。湾内には42門砲の旗艦と各船が投錨している商船を守ることが出来る12門の大砲を積んだ2隻のパタチェ船があった。副王自身の推算によると、港とその間近の場所を防衛するのに2,000人の男が数えられると期待していた。

オランダ人にとって、最良の機会は、パニックと混乱が、特にリマで、支配していた封鎖の第一ないし第二日であった。その後の何週間かの間、遠征隊全体が封鎖を維持しているだけではなく、5月14日にコルネリス・ヤコブスがエンドラハト号、ダビッド王号、グリフィン号、そしてグレイハンド号の4隻で、当初の計画に沿って、アリカで上陸する意図で南方へ帆走した。再び彼等は大して防衛はされていないと信じ込んでいたが、到着してみると、攻撃を思いとどまらせるのに十分な防衛活動が見られた。しかし実態は、アリカの代官フアン・デ・サラス将軍が、つい最近、港には武器が大変不足しており、所有する4門の大砲を据えるために直ぐに朽ちてしまうアドベの砦しかないと報告したところであり、オランダ人達の買い被りであった。カリャオへ戻る航海中、ピスコにおいても、この小艦隊は、何隻かのランチを上陸させようとしたが、追い払われてしまった。オランダ人の日誌は、スペイン側の資料で、単に塹壕掘り、胸の高さの壁の建築、そして台上への大砲の据付と書いているのに対して、15フィートの防護壁と言っている。ただ、確かにカリャオから大砲4門と300人の武装した男が最近派遣されていた。この小艦隊は6月15日に封鎖に再度加わるためにカリャオに戻った。

その間、5月23日にヴェルショールに指揮された200人の第2部隊が、モーリシャス号とホープ号に乗って、プナ島とグアヤキルの重要な造船所へと北に向かって出帆していた。同地は17世紀に多くの侵略者達の攻撃目標となっていた。代官と他の影響力のある市民達との間に論争があったために、早くからの攻撃の警告を生かす努力がほとんど為されておらず、オランダ人は何の抵抗も無しに、建物を略奪し、少なくとも4隻の投錨中の船を捕らえ、カカオ、ワイン、チーズ、そして乾パンの積荷を奪った。2~3日後の6月6日に、200人の防衛者中僅かに80人しか火器を有しないグアヤキルを占拠して放火と略奪を行い、教会を焼いた。

オランダ側は35人が殺され、直ちに仕返しとして、17人のスペイン人捕虜がプナ沖で海に投げ込まれた。スペイン側の記録は新教徒達の残酷さに焦点を当てて、活写して、「そこで私掠者達は僧を捕まえ、カトラスで彼の頭を裂き、腹を開き、まだ生きている内に内臓を取り出

した」と書いている。もう一つ焦点が合わされた点は、インディオ達の命と所有物はこれらの略奪と残酷さから故意に除外されたことである。この一団は8月5日にカリャオの封鎖に戻った。

レルミトのナソー船隊のカリャオ封鎖の当時の銅版画



この間封鎖を維持していた残りの5隻の船と乗組員は今や、カリャオに面しているサン・ロレンソ島にベースを作った。この間にも防衛側と砲火を交えたり、火船を商船群に放って失敗すること(6月6日)があったりした。6月2日に提督^{アドミラル}レルミトが死んだが、封鎖にはほとんどかかわっていなかった。彼の後任はヒューゴ・シャペンハムであったが、あまり人気が無く、既に経験不足を見せていた。彼の遠征隊のリーダーとしての最初の仕事は捕虜の交換のアレンジであった。6月13日に白旗を伴った1隻のランチが陸に送られ、約30人のスペイン人の解放を提案した。副王がこれを拒否した時、この内の21人が首を吊られた。捕虜の処刑は、ナッソー船団の中で絶望的な兆候と解釈され、天秤のバランスは防衛側に有利に傾き始めた。船隊では逃亡が生じた。逃亡者達はスペインの当局者達に対して、船、乗組員、武装についての

正確な詳細、遠征の具体的な目的、そして何よりも船隊の力を侵し始めている内部問題について打ち明けてしまった。スペイン側は約 13 隻のオール漕ぎの小船を 5 月と 6 月の間に建造し、武装した男達を載せて素早く湾を渡り、攻撃に晒されている全てのスペイン船の周りにバリケードを築いた。湾の防衛の最終的なものは、近づこうとするオランダ船の帆柱を倒す目的で、3 乃至 4 門の大きな大砲を据えつけた平底のバージであった。陸上には、50~60 門の大砲が、浜辺に戦略的な位置で並べられて、砦ででも多くの大砲が待ち構えていた。また副王は防衛に当たる者達をあらゆる手段を使って、合計で約 4,600 人を集め、この数字はオランダ人の 4 倍であった。



1630 年頃のオランダ船「モーリシャス号」(レルミト船隊の同名の船ではない)

ついに 8 月 14 日に船隊はサン・ロレンソ島を離れ、封鎖を放棄した。レルミトを含む 70 人の埋葬者をそのまま残したが、彼等の唯一の勝利が 200 人によるグアヤキルの短期の占拠であったことを思い出して、全遠征隊がグアヤキルに戻る第二の略奪が計画された。8 月 27 日に 500~600 人の間の男が上陸し、激しい争いとなった。それはキトーから 50 人のアルブケルケ銃兵が到着し、さらにチンボとクエンカから 100 人の男が到着していたからであった。このように運命が反転したため、船隊はヌエバ・エスパーニャに向けて出立した。10 月 28 日アカブルコにおいて、東インド諸島へコースを取ることを決定し、この時点から自分自身の運命を個々の船が求めることになったので、遠征は此处で終わったと言える。エーンドラハト号は 1626 年 6 月 9 日にオランダに到着した。

明らかにナッソー船隊の成果は満足からは程遠かった。レルミトの遠征は、最終的にはヨーロッパの軍事紛争と宗教対立を、大洋を超えた世界へも移すことを内包する壮大なスキームに更に一步を進めたものと見る事が出来るであろう。

副王国の心臓部の封鎖期間中、奪われた略奪品と燃やされた船の結果として蒙った具体的かつ項目化された全損失は 527,000 ペソであった。

5) 西インド諸島のバッカニア、シャープによる南海の略奪

1670 年代が終わる前に既に、マゼラン海峡やホーン岬というアメリカ大陸南端ではなく、西インド諸島という新たな方向からペルーへ略奪をしかける勢力が集められていた。それを構成していたバッカニアは、17 世紀初め頃に、西インド諸島、特にエスパニョーラ島の北と北西でそれと見分けられるグループであった。彼等はそれらの場所で、本土へ向けての発見と征服の潮流に乗っていったスペイン人植民者が見捨てていった野性化した家畜の群れを深い森の中で見つけた。これらの家畜は、難破船から逃げ出した者、逃亡黒人、そして司直の手から逃れようとする様々なごろつきや悪者達にとっての食料であり、通りかかった私掠船や商人に供給物売る稼ぎであった。エスパニョーラ島とその近くのトルトゥーガ島にバッカニアが定着したのは、フランスとイギリスの植民者のサン・クリストバルからの放逐に続く 1630 年頃と思われる。彼等を強制的に追い払うスペイン人の試みにもかかわらず、1640 年に英国人が追い出されるまで、これら英仏両国籍の者達は気まずい思いで隣り合わせになって暮らしていた。英国人の多くは、もう一つのバッカニアの基地であるプロビデンス島に逃げた。1655 年に英国人がジャマイカを取ると、さらに決定的に作戦の本拠地は別れ、英国人はポート・ロイヤルに居住し、フランス人はトルトゥーガとエスパニョーラ島のサント・ドミンゴに残った。それでもこの後も、南海について述べるように、スペイン人に対する実際の略奪のためには、かなりの程度で混在し合い、協力関係があった。

バッカニアの最盛期は 1660 年代最初の頃であったが、それはイギリス人が、西インドにおける商売の取り分配分をもっと平和的な方法で行うことが出来ないだろうかと思いつめていた時であった。しかし、さしあたっては、英仏両国の植民地の総督達は自分達の植民地の安全を保証してくれる者としてバッカニア達を支援することを認めており、また略奪品から来る収入を得るために自分達の港で荷揚げをさせた。このことは、ジャマイカの略取によって、特に英国人にとって新たな喫緊の関心事となり、チャールズ 2 世は、新世界における臣下の不法活動を取り締まる政策を取り始めたが、実際の政策はヨーロッパにおける同盟関係次第であった。既にバッカニア行為は、平穏な設営地の維持と通商の拡大の邪魔になっていると感じていた英国人の植民者達の反発にも出会った。従って、バッカニア達の実際の抑圧政策は断続的にしか実施されず、完全な実施に至るには 20 年以上を経たのであった。しかし結局は西インド諸島

でのバッカニア活動の制限は増加したため、バッカニア達の中には、その富が伝説となっていた南海において幸運を求める者達が出てきた。

イギリス人が、ペルーへのアクセスを開くことになる襲撃のために西インド諸島の基地を離れようとしていたのはスペインと英国の平和交渉の最終段階のことであった。スペイン人がジャマイカに対する報復行為の準備をしていることを単に恐れていたことに始まって、総督モディフォードはヘンリー・モーガンが、スペインからのガレオン船の集結地であるポルトベロの劇的な攻略を成し遂げさせることになるバッカニア行為を引き受けることを 1688 年に認めた。実際のスペインの攻撃を受け、スペインとの話し合いが進んでいることを知りながら、更にモディフォードは 1669 年にマラカイボ、そして 1671 年 1 月遅くにパナマを略奪することを認めた。モーガンはドレイクでさえも失敗したことを成し遂げた。パナマ地峡は閉ざされ、ペルーの銀の集結地であるパナマは焼け落ち、南海とペルーへの道は開かれた。彼の男達の中にはこの開かれた展望に魅せられた者達もいたが、モーガンは彼等にその考えを捨てることを納得させた。しかしながら 10 年後にその考えは実現された。

またペルーにおいて、1671 年 1 月遅くに、副王レーモスはチリ海域に英国人が居るとの誇張された報告を受け取ろうとしており、3 月 8 日にパナマの悲劇的な損害を報告された。同月遅くに、彼は本国に対し、全スペインのインディアスが危険に陥る前に、西インド諸島の外国人侵入者を一掃するために小艦隊の創設の許可を急がせる手紙を書いた。7 月 17 日の英国との平和条約をリマで公布した後、同月末に彼は本国に対し、カルタヘナとポルトベロに極めて近い英国の植民設営地が将来の危険の種となる警告と、条約の条文が、英国船がペルー港に入ることを許すように見えることの警告を、2 度目となるが、書き送った。1672 年 5 月に彼は再び、ジャマイカを取り戻し、ペルーへの攻撃を差し向けることになるポルトベロとパナマ地峡のコントロールを行う英国の基地を拒否することを促した。本国の返事は、マドリッド条約は尊重されねばならないという素気ないものであったが、副王レーモスの誤りは、彼の警告が時期尚早であったことだけであった。

1670 年代は、西インド諸島の英国人バッカニア達を鎮圧する法律を制定するどころではなく、逆に、支援とチェックとのシーソーゲーム的な動きが見られるものであった。モーガンはジャマイカに戻り、条約が批准されていたのを知り、条文はスペインと英国世界のあらゆる部分で公表され、彼とモディフォードの両名は逮捕されてロンドンに呼び戻された。しかし、トーマス・リンチ卿が法律を強制施行し、自発的に廃業したバッカニア達は許すと申し出た一時期の間において、両者はボーガン^{ロー}卿の行政組織の中で、それぞれ副総督^{リベラント・デ・バナー}と裁判長^{チーフ・ジャスティス}としてジャマイカに戻って来た。スペインの副王と総督は英国の平和への提案を、特に新世界において、なかでも西インド諸島ではほとんど信頼していなかったことは正しかったようである。西インド諸島では、英国バッカニア達に制限を課している時でも、彼等は、トルトゥーガとサント・ドミ

ングにおいて、例えば 1675 年まではドレジョンと、その次の 10 年は彼の後継者ドゥ・プアンセのようなフランス総督の支援を得たように、フランス人からの私掠許可状で襲撃と略奪を維持した。英国人は、外国の旗の下で働くことを禁止し、以前にフランス人による私掠許可状で航海した者達に赦免を申し出て、1677 年にこの抜け道を閉ざそうとした。しかし、カーライル伯爵が 1678 年に到着すると、反バッカニア法の施行の弛緩の時期が到来した。

1679 年 12 月にポート・ロイヤルを出立し、ペルー海岸に沿ってその航海の大部分をシャープに率いられたバッカニア達の最初の者達は、具体的には、新総督からホンジュラス湾でのログウッド（日本名アカミノキ、学名: *Haematoxylum campechianum*、樹液が赤い染料となる樹木で、短く切られて出荷されたのでこう呼ばれた。パウ・ブラジル: *Caesalpinia echinata* とは別）の伐採の権限を付与された者達であった。モーガンの手柄以来、パナマ地峡の通り抜け道は、フランスのバッカニアのルソンヌとブルナーノがそれぞれ 1675 年と 1678 年に試みて失敗に終わったものを除き、侵略者達で誰も足を踏み入れた者はいなかった。しかし、これら二つの挿話の重要な結果として、またスペイン人の獲物を狙ってこの地峡の北部海岸に沿ってバッカニアの舟がいつも漕ぎ回っており、ダリエンのインディオ達の設営地と友好関係が出来上がった。南海を求める今回のバッカニア達、そしてこの後のバッカニアにとって、これらのインディオ達は計り知れない実利をもたらした。

このグループはシャープ自身に加え、ジョーン・コクソン、コルネリウス・エセックス、ロバート・アリソン、トーマス・マケッテ、そしてフランス人ジャン・ローズとブルナーノから成り立っていた。今までのケースでもほぼ間違いなく起こったように、港から見えない所まで来ると、それまで公言していた略奪はしないという意図を捨てて、私掠することに決め、この地峡の東端においてピネス島に進路を定めた。そこで、大儲けの略奪を期待し、彼等を南海に向けて陸地を行進して案内することを誘っていたインディオ達との最初の出会いが行われた。しかし、そうこうするうちにこの冒険は延期され、コクソンのリーダーシップの下に、モーガンのポルトベロ攻撃をもう一度行うための計画が合意された。

彼等がルソンヌと合流していたスプリングジャーズ・キー（パナマのカリブ海側のサン・ブラス諸島にある）に船を残し、約 250 人の男達がカヌーに乗ってプエルト・デル・エスクリバーノに向かい、そこで下船して、町の後ろの無防備の場所へ行くために 6 日間の行軍を始めた。そして 1680 年 2 月 7 日の襲撃はスペイン人を完全に驚かせた。略奪は銀で 50,000 ペソ、布地で 20,000 ペソ分に上った。分配金はエスケメリンによれば £ 40/人、コクソンによれば 100 ペソ/人であるが、バッカニアの習慣で、これに役割による割り増しと傷に応じて割り増しがあった。

ゴールデン島を目指すルートで 3 月 23 日にボカス・デ・トロから、次のようなメンバーの英国人グループが出立した。

キャプテン	トン数	大砲数	人員数
-------	-----	-----	-----

ジョーン・コックス	80	8	97
ピーター・ハリス	150	25	107
バーソロミュー・シャープ	25	2	40
リチャード・ソーキンス	16	1	35
エドムンド・クック	35		43
ロバート・アリソン	18		24
トーマス・マケット	14		20

インディオの酋長アンドレアスに導かれて、船を守るためにアリソンとマケットをゴールデン島に残して、彼等は 1680 年 4 月 5 日に本土を横断した。グループの主となる中核がペルー海岸での努力に注力する前の、次の 2~3 ヶ月に渡るパナマ地峡、パナマ湾、そしてヌエバ・エスパニャの海岸沖における作戦行動はバッカニア達の典型的な行動パターンを示すものであった。それぞれが自分達自身の旗を担いで、連れ立って行進し、最初のターゲットであるパナマ地峡の東端サンタ・マリア島に向かった。1680 年 4 月 15 日に攻撃を開始するに当たって、黄金という形で幸運を勝ち取ることを望んでいたが、川で砂金がいづらか産するものの、この場所は主としてインディオに対するスペイン人の防衛のためのものであり、バッカニア達は失望させられた。

サンタ・マリア島に 2 日間居た後、バッカニア達はアンドレアスとその仲間のインディオ達手引きによってカヌーでの地峡横断を再開した。4 月 20 日にサン・ミゲル湾において、30 トンのスペイン船がシャープの手に落ちた。翌日小船がピーター・ハリスに捕まった。コクソンとソーキンスに率いられた 1 団がチェピリョ島の落合地点に向かったが、そこで急いで逃走するバーク船 1 隻を取り逃がした。この船がパナマ総督にバッカニア達が居ることの警告を発したと思われる。というのは、2 日後にペリコ島に到着した時、3 隻のバーク船に 50 人を乗せて、先手を打った攻撃が出来る準備が出来ていたからである。

バッカニア達は船を漕いで疲れており、メンバーが僅か 68 人まで数が減っているにもかかわらず、パール諸島近くで飲み水を探しに方向を転換しようというシャープの決断に勇敢にも従った。2 隻のスペインのバーク船が捕らえられたが、3 番目の船は逃げてしまった。スペイン側は 75 人が死に、20 人が負傷し、バッカニア側は 11~18 人の者が殺され、両足を撃ち抜かれたピーター・ハリスを含め、34 人が傷ついた。彼は傷が元で直ぐに死んだ。護衛の小艦隊が敗れたので、バッカニアは大した困難も無く、ペリコに投錨していた他の 5 隻を捕獲した。これらの内の 1 隻の 400 トンのサンティシマ・トリニダー号は、一時的に傷を負ったバッカニアの病院船に使われ、その後は残った航海の大部分シャープの旗艦となった。一方シャープは、カヌー組によって既に焼かれていた設営地を見つけるために 4 月 23 日にチェピリョでの落ち

合い場所に到着した。彼はパナマ沖で、先ほどの苦い交戦の翌日に仲間と再度一緒になった。しかしながらそこで、南海に残るか、それともジャマイカに戻るかについて議論が起こった。コクソンは戻りたい方の首謀者であり、今回は彼を説得することが出来ず、後日、彼の部下約 50 人と去って行くことになった。直近の小艦隊との戦いにおけるシャープの臆病さはコクソンに、彼とは別れて別途幸運を探すのがベストと思わせたようである。コクソンはリチャード・ソーキンスに指揮を替わった。

この湾からバッカニアを追い出そうと望んでいたスペイン人の戦力を破ったものの、バッカニアには、パナマの新市に対し、攻撃を行う力が無かった。4 月 29 日にはタボガ島（パナマ市の沖にある島）へ向い、ここに 2 週間いる間に、南海での彼らの活動を遂行する手段を得て、元気付けることが起こった。というのは、未だに彼らの多くが乗っている様々なカヌーやボートよりは、この目的に適った獲物を捕まえたからである。それは 1 隻のバーク船で、嬉しいことに積荷はワインとブランディーを 1,400 壺、火薬 100 壺、パナマの陸戦隊に払う給料 5 万ペソであった。戦利品は一人当たり 240 ペソであった。ワインとブランディーをタボガ島のスペイン人に 3,000 ペソで売った。シャープは、有用な小麦粉を積んだこの 100 トンの獲物に、乗組員共々乗り込んだ。バッカニアの戦力は、いまや、ソーキンスが指揮するトリニティー号、シャープとクックがそれぞれ指揮する 100 トンの 2 隻の船及び様々な小舟となった。

長旅のバッカニア遠征にとって必要な品々、特に新鮮な肉が不足していたので、ソーキンスはヌエバ・エスパーニャの海岸のプエブロ・ヌエボを略奪する計画を立てた。ところが彼は、残りの仲間が着く前の 5 月 23 日に、攻めを急いで命を落としてしまった。その死によって、「人気の無い」シャープが全体の指揮者としてトリニティー号に乗った。彼の不人気は、彼が選ばれると、70 名が、すでにカリブ海に戻ることにしていたグループに鞍替えしたことで分かる。彼らに小舟を与えて好きなように行かせた。ペルーに向けて南下する残りの者は 146 名であった。その中には有名な物書きで、日誌を出版したバジル・リングローズ、ダンピア、そしてライオネル・ウェイファー（理髪あがりの外科医）が居た。そしてジョーン・コックスという男が（訳註：死んだ同名の船長ではない）が獲物の内の 1 隻で、メイフラワー号と名を変えた船の船長となり、40 人の乗組員を共に出立した。

彼等は上記の準備を行ったコイバ島で（パナマの西部のコスタリカへ向かう途中にある）、船を傾船修理し、新鮮な食料を補充する目的で 6 月 6 日に出航した。7 月 17 日と 25 日の間にこの二つの目的を果たした。そしてゆっくりと、サン・フランシスコ岬とマンタを通過して、ペルー海岸に沿って進み、8 月 13 日にラ・プラタ島に到着した。8 月 25 日グアヤキル湾で最初に出会ったのはトーマス・デ・アルガンドーニャが船長の小船で、彼から、バッカニアが来襲する警告が出回っていることを知った。副王リニャン・イ・シスネーロス は 200 丁のアルケブス銃と同数のマスケット銃、3 門の小大砲、キトー、クエンカ、リオバンバ、そしてロハの町で

集められた 800 人の男をグアヤキルに派遣していた。しかし国王から命じられていたグアヤキルの砦の建設は、資金が無くて行っていなかった。アルガンドーニャからの情報で、重要な港は防備の準備がなされているが、小さ目の港はそうでもないことが確かめられた。そしてブランコ岬を 8 月 26 日に通過し、31 日にパイタの港を通過して南下。9 月 4 日にカカオ豆、衣類、そして材木を積んで、グアヤキルからカリャオへのルートを進んでいるサン・ペドロ号を捕らえ、必要な物を奪った後、捕虜を自分達の船に移してから、いつものように主帆柱を切り倒して、同船を放した。

カリャオをかなり過ぎてから波が荒くなり、10 月 27 日にやっとイロで最初の 48 人をカヌーで上陸させた。騎兵と歩兵のちょっとした抵抗を受けたが、水、小麦粉、油、果物を少し手に入れた。内陸に進んで小さな砂糖工場を発見したところ、その住民達は工場を焼かないように懇願し、代償に 80 頭の家畜を差し出すと申し入れ。しかし、住民達は家畜を集めるという間に騎馬の男 300 人を集め、バックニア達を町から追い出そうとした。シャープは敢えて戦いを挑むことはせず、翌日、工場に火を放って退却した。ちょうど 1 か月後にコキンボで同じような情景が繰り返されることになる。コキンボでは 35 人の先遣隊が 12 月 3 日上陸したが 150 人ものスペイン人が待ち構えていた。トリニティー号から援軍が送られ、スペイン人を片付けると、ラ・セレーナに進みここで 4 日間、略奪をすることになった。イロと同様に、所有物の安全と町への放火を恐れた住民達は代償金 95,000 ペソを申し出た。しかし、ここでもまた住民達は金を集める代わりに、海賊達の退路を遮るための武装した男達を集めた。激しい戦いの後に住民達の非常線は破られ、シャープ達は、500£に上る銀塊と、教会から奪った多くの宝石と共に海上に逃げおおせた。副王は後に、大した抵抗もせず町を明け渡したラ・セレーナの町を非難した。

幸運にも助かって、シャープは 12 月 7 日にフアン・フェルナンデス諸島に向かって出帆した。多分、マゼラン海峡を通過して西インド諸島に戻る前の休養と食糧補給が目的であったのであろう。乗組員達は、3,000 ペソ即ち£1,000 という僅かの利益しか上げていないことに文句を言い、北に戻って南海での冒険稼業を続けたがった。そこで、ジョーン・コックスは、多数決で司令官を決めることを提案した。シャープはコックスが自分の後を継ぐのが望ましいと思っていたが、ジョン・ワトリンが司令官に選ばれた。そして、チリの総督からシャープを探しに、前年 7 月以来派遣されていたスペイン船が何隻か望見されたので、1681 年 1 月 12 日に急いでこの諸島を出航した。スペイン人の最大の船は、サンチアゴ・ポンテッホスとペドロ・ソリーリャの指揮下で 4 月のペリコでの海戦のニュースを副王が受け取って 1 週間後の 1680 年 7 月 6 日にカリャオから出港していた。この艦隊は、727 人が乗り込んでいたが、大砲は 30 門しかない主に個人所有の商船 8 隻から成っていた。バックニア達が戻って来そうにないよう思えたので、パナマの防衛隊のために 1,000 丁の火器、ロープ、弾丸、そして火薬の他に、リマ

の商人ギルドが援助を求めるために送った寄付金 5 万ペソを積んでいた。この船隊の仕事は、本来はバッカニアが副王国の心臓部に到着する前に、彼等に立ち向かうことであったが、これに失敗し、副王は彼等が西インド諸島へ「逃亡すること」を阻止するのに躍起となっていた。しかしこれも、シャープが既にゴルゴーナ島での傾船修理に行く途上であったので、出来なかった。

副王は、シャープのペルー沖到着というニュースに接するやいなや、好機到来とばかり、艦隊のパタチェ船サン・ロレンソ号に、マヌエル・パントッハ指揮の下、150 人の男を 20 門の大砲と共に乗せて、カリャオの南の湾や入り江を偵察させた。しかし、いつものように今一步のところで遅れをとり、彼等がイロに到着した時にはまたもやバッカニアは去ってしまった後であった。1681 年 1 月の初めに、サン・フアン・エバンヘリスタ号という個人の船が、別の偵察をするという王室から出た命令で、フランシスコ・デ・サラサールの指揮の下でパナマ湾に向かったが、シャープ達は未だフアン・フェルナンデス諸島に居た。南へ向かっていることがリマに知らされた時、1681 年 2 月初めに、バルディビアへその年の港への援助金を運ぶためにディエゴ・デ・バラサが派遣されたが、同時にチリ水域に残って島々や本土の海岸を偵察する指示も出されていた。この時シャープ達はアリカの略奪をした後で、北へ戻る決断を既にしていた。

このような広範囲に渡る侵入者の追跡は、この世紀初頭の、初期のオランダ人達の到着時の動きを思い起こさせる。今回、成果はなく、銀のパナマへの搬送を護衛する必要性和タイミングが重なってしまった。そして 2 月初旬に、ポンテッホの旗艦と小船はパナマ湾から呼び戻されて、銀の船積みをする間、港の護衛をするためにアリカへ送られたが、これもまた遅きに失した。彼等はアリカへの水銀の船積みを警護するために 3 月にカリャオを離れていたパントッハと合流した。しかし、副王にとっては幸いなことに、未だ近くに居たバッカニア達に邪魔されることなく、これらの行動を済ませ、銀の小艦隊はついに 9 月に安全にすることが出来た。この時シャープは既にチリ海域に再び無事戻っていた。

ワトリングの指揮の下に銀を得るためにアリカに狙いを定め、状況が改善されていることを望みつつ、1 月 30 日にこの地に上陸した。南海に入って最も激しい戦いになるとも気づかずに、約 90 人が午前 8 時に町に近づいた。二手に分かれ、ワトリングの隊は住民の抵抗を抑止することを目的とし、リングローズとシャープの別隊は手榴弾を持って砦を襲った。バッカニア達は、住民達は家から砦に逃げ込むと考えていたが、アリカの 6~700 人の住民は強力な抵抗を示し、ワトリング隊は 4 時間に渡り持ちこたえたが、ついに退却せざるを得なくなった。その途中でワトリングそのものが殺された。下船したバッカニアは 28 人が殺され、17~18 人が負傷、未だ戦える人数は 47 人であった。スペイン側は 23~24 人が殺され、60 人が負傷した。一方で砦へ向かったものは超人的な働きをしたが、隊長のワトリングが殺されたことを聞き、急いで船に戻った。バッカニア達は再びシャープに従うようになったが、そこでカリブ海に戻るか、

あるいは南海に残るかの議論が再燃した。決断できないままに、食料と水を手入手するため、まず南へ行って 3 月 13 日にウアスコ、28 日にそれから北のイロに上陸した。

最終的に 4 月 16 日にラ・プラタ島で、投票が行われ、ダンピアとウェイファーを含む反シャープ派が少数となり、西インド諸島に帰ることとなった。翌日、44~45 人のバックニアと 3 人のインディオが、1 隻のロングボートと 2 隻のカヌーに乗って、パナマ地峡への道を探った。そしてこの隊は陸地を行進している間に、乾燥を行っていた火薬が爆発してウェイファーが膝に傷を負い、ダリエンのインディオ達の中に残らざるを得なくなった。彼は 4 カ月間のインディオの集落での滞在中に現地人の言葉を覚え、彼等の習俗に関する素晴らしい報告書を書いた。

一方シャープの下に残ったのは約 70 人であったが、天候が悪化していたので北に向かい、ニコヤ湾とドゥルセ湾の近くで傾船修理や大幅な船の改造を行った。7 月 10 日にサン・フランシスコ岬で獲物の船を見付けた。これに追いつくと、この船は前年に彼等が捕獲したサン・ペドロ号であった。今回の積荷は、カカオ、衣類、銀塊、箱に入った 21,000 ペソ、袋に入った 16,000 ペソの銀貨であった。この銀貨は一人当たり 234 ペソで乗組員に配分された。また 7 月 27 日にパサード岬沖で連絡船ハックルト・ボートを捕らえた。値打ちのある物は積んでいなかったが、聴聞院の重要人物とその家族を乗せていた。

その 2 日後、カリャオからパナマに向かうルート上で、商船サント・ロサリオ号という素晴らしい獲物を見付けた。その船長フアン・ロペスは、何を間違えたのか、バックニアが近づくまで手をこまねいていた。近くになって火蓋を切らざるを得なくなり、船長と何人かの船員が死んだ。略奪品は数百壺のワインとブランディー及び各人 94 ペソの配分になった銀貨であったが、シャープが最も気を引かれたのは乗客で、「この獲物の中に、年の頃 18 歳の淑女が居た。名前をドニャ・フアナ・コンスタンタと言い、大変器量の良い人で、その主人の名をドン・フアン・デ・ロサリオという。」と書いている。リングローズも彼女に心を動かされ、「私が南海で見た最も美しい女性である。」とコメントしている。この女性に見とれてか、彼等は未精製の銀の延べ棒 700 本を船から移すのに失敗してしまった。「これは我々の怠慢だが、我々は錫だと思ってしまった」とリングローズは書き記している。後になって、ビレットにする目的で取って置かれた 1 本を延べ棒にする時に初めて銀であることが分かった。この 1 本は£75 で売れた。

ロサリオ号には、シャープがその価値を正當に評価出来なかったもう一つの獲物があった。それはスペイン人が作成した地図と海図のコレクションである。

ロサリオ号の出来事はこれまでに最も有益な活動であり、彼等が約 15 ヶ月前に南海に入ってから最も活動的な月に終わりを告げるものでもあった。8 月中旬にラ・プラタ島に立ち寄り、同月 28 日パイタに上陸しようとしたが失敗し、南に向かった。マゼラン海峡を目指したが、10 月終わり頃に強風に出会い、どんどん南下させられて、マゼラン海峡の入り口を見逃し、ホ

ーン岬を見た初めての英国人となった。多分それまでの航海者達の中で最も南まで到達したようである。12月25日頃リオデジャネイロと同じ緯度に達した。1月28日にバルバドス島を望見し、1月30日にアンティグア島に上陸しようとしたが、この頃既に英国とスペインとの戦争は終わっており、島の総督コドリントン大佐は海賊の入港を拒否した。賭博で無一文になった7人に、乗っていた船を委ね、残りの者達は2隻の英国船で帰国した。リングローズと13人はリズボン・マーチャント号で、1682年3月26日にダートマスに帰り着いた。ロンドン駐在のスペイン大使はバッカニア達の帰国を知ると、海賊行為と殺人罪で裁判にかけろべきだと主張した。5月18日、海軍本部はシャープと他の2人を逮捕した。一方ロサリオ号から押収された海図は国王チャールズ2世の天覧に供された。王とその顧問団によって海軍と裏取引があったらしく、3人は6月10日に海軍高等法院で無罪となった。

5) シャープ船隊のトーマス・ダンピアとバッカニア地図帖

シャープ船隊にはウィリアム・ダンピアが参加していた。彼は世界周航を3回行って、17世紀の航海者の中でもひと際目立つ存在である。18歳の時に商船に乗組んで、ニューファンドランドに航海した。帰国すると東インドに行き、ジャヴァ島に立ち寄った。オランダとの戦争が始まると、英国王室海軍に入隊し、蘭英戦争に参加したが病気になり海軍を去ると、ジャマイカの農園で働くようになったが、仕事が気に入らず、メキシコのカンペチェに行き、バッカニア達が多く働くログウッドの伐採人となった。1676年6月のハリケーンによって、ログウッドの林が壊滅してしまったので、バッカニアの海賊行に加わったが、1678年に英国に一度戻って結婚した。翌年またジャマイカに行き海賊に加わった。その中にバーソロミュー・シャープ、ジョーン・コックス、リチャード・ソーキンスらが居た。1680年にシャープらとパナマ地峡を横断して、上記のようにペルー海岸を荒らした後、ホーン岬経由カリブ海に戻り、そこでも海賊稼業をした。ヴァージニアに行き1年暮らしたが、ジョーン・コックスが南海に行く計画を立てたので、1683年8月これに参加。昔の仲間のライオネル・ウェイファーも居た。一度アフリカのヴェルデ岬まで行って、季節風を利用しようとしたところ強烈な嵐に会い、シエラ・レオーネ河にたどり着いた。ここで36門砲を備えたオランダ船を捕獲し、大西洋を横断してホーン岬を越え、フアン・フェルナンデス諸島に到着したが、ジョーン・コックスが病死し、エドワード・デイヴィスが後を引き継いだ。パイタを占拠したが5日待っても代償金は支払われず、町を焼き払って北上、パチェカ島で他のバッカニア達と合流して、カリャオから来る南海艦隊に護衛された銀の船隊を襲った。しかし、スペイン側は6隻の軍艦、6隻の小型船、そして多くのカヌーより成り、3,000人が乗り組んでいた。それに対してバッカニア側は960人が小型船に分乗しているのみであり、かろうじて逃げる事が出来ただけであった。スウォン船長がシグネット号で東洋に行くことを知って、ダンピアはこれに参加し、1万2,000キロの航

海をしてグアム島に食料も不足して到着。ここからミンダナオ島に行ったがスウォン船長は享楽の生活に溺れ、6ヶ月たっても出立しないので、彼をそこに残してタイから中国沿岸を航海した後、1688年1月4日にオーストラリアに着いた。英国人で初めてオーストラリアの土を踏んだ一人となった。ダンピアはその後様々な冒険を重ね、ケープ・タウン、セント・ヘレナ島経由で1691年9月16日に2年と6カ月ぶりに英国に帰国した。日誌や手記を「世界新周航記」として出版して大成功を収めた。その後海軍本部から誘いをうけ、1699年に船長として再び航海に出てオーストラリアを探検したが、大きな成果もなく、アセンション島沖で船が沈没した。かろうじて海軍の船に助けられ帰国したが軍法会議にかけられた。ダンピアは、人好きがするとはいえないタイプで、口汚い奴、飲んだくれ、統率力がないといろいろな仲間から罵られている。部下の扱いも過酷であったようである。しかし名声は衰えず、商人達にセント・ジョージ号で私掠船の指揮を任されて、船長となり、もう1隻チャールズ・ピカリングが船長の船と合流して、2隻で南米に行ったが、途中でピカリング船長が死に、トマス・ストラドリングが後を継いだ。このピカリングがフアン・フェルナンデス諸島に停泊した時42人が脱走を試みたが説得に応じて帰船した。しかしアレクザンダー・セルカークだけが説得に応じず、彼を島に残した。彼こそが、後にダニエル・デフォーのロビンソン・クルソーのモデルになった男である。ダンピアはパナマ湾で海賊行為を行ったが、結局大きな成果は得られなかった。乗船のセント・ジョージ号がボロボロとなったので、捕獲した小さなスペイン船に乗って、太平洋を横断して、1707年の末にイギリスに戻った。これが第2回の世界周航である。帰国後またもや世界一周に加わらないかという誘いを受けたが、今度はウッズ・ロジャーズが指揮する合法的な船隊のピロート兼航海士であった。1708年8月にブリストルを出航し、11月にブラジルに至り、南進してホーン岬を回り、1709年2月2日にフアン・フェルナンデス諸島の湾に入った。夜に灯りが見えたのでボートを調査に送ると、それは以前島に置き去りにされたセルカークが焚いた火であった。彼は4年4ヶ月一人で暮らして見つけられた当初は言葉もままならなかった。この後4月16日にスペイン船を攻撃し成功し、太平洋を渡り、マニラ・ガレオン船と戦ったり、様々な冒険をしたりした末、ジャヴァでオランダ船と合流し、オランダに行き、1711年10月14日にテムズ川に戻った。航海中に奪った財宝は80万ポンドと報告された。ダンピアは1,500ポンドの分け前を得た。3年後に63歳で死んだ。

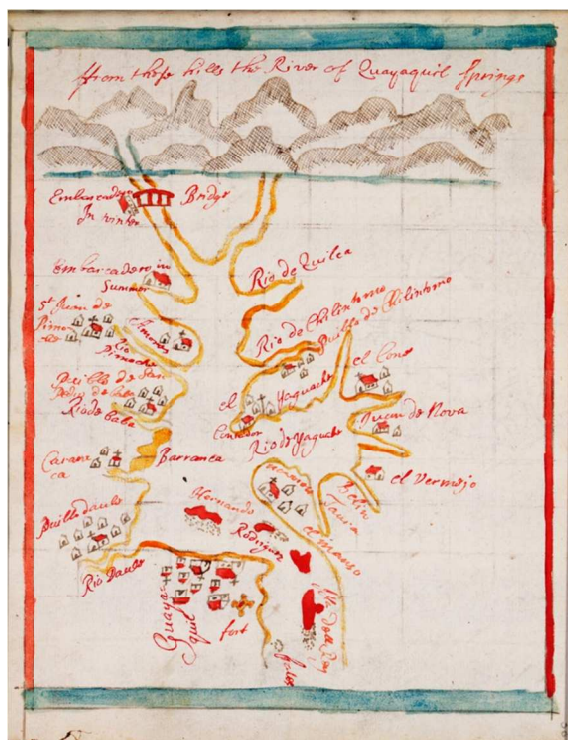
ダンピア以外にもシャープ遠征隊には、日誌や記録の類を残し、それが出版されて、巷間に広く読まれた者が何人かいる。そうした出版物が多く、海賊志望者を生んだ面も否めない。そうした一人はバジル・リングローズでダンピアに匹敵する克明な日誌を残した。ダンピアは「私の聡明な友人」と呼んでいる。彼の手記はエスクエイメリンの有名なバックニアの歴史「アメリカのバックニア」の1684年版に収録された。なお、エスクエイメリンはフランス人で、バックニアと共に暮らし、同書はベストセラーとなった。シャープ遠征隊では、ジョーン・コッ

クスも日誌を残した。ライオネル・ウェイファーは外科医として遠征隊に参加し、上記したように、シャープ隊から分かれてパナマ地峡を横断する際に足を怪我し、インディオ達の間で暮らした。そこで見た習俗を記録し、航海記録も含め、英国に帰国後「新しい航海とアメリカ地峡誌」を1699年にロンドンで出版し、好評を得たので1704年に再版が出された。

スペイン人は、太平洋岸について多くの探検を行い、地図、海図を残した。しかしスペイン人は他国にこれらの探検結果や地図が知られることを極度に恐れ、秘密とした。19 ページに掲げたワシントンのナショナル・ライブラリーの中南米の海岸図もその一つで、未だ研究が発表されていない例である。

46 ページに、シャープがパナマからカリヤオへの途上、商船サント・ロサリオ号を捕獲し、その際スペイン人が作成した多数の沿岸の地図を入手したことを記した。シャープ達はその本当の価値は見抜けなかったが、地図類は今後の航海に重要であり、これを故国に持ち帰った。

故国ではその素晴らしさに気づき、英語に翻訳され、ロンドンの地図製作者ウィリアム・ハックが数部の写本を作った。美しく彩色された地図帖に仕上げたもの 1 冊が、シャープ自らの手で国王チャールズ 2 世に献呈された。現在グリニッジの海事博物館に収められている。しかし、この地図は一般の目に触れることはなく、利用されなかった。



グリニッジに保管されている国王に献呈された彩色版の
グアヤキルの部分

ウィリアム・ハックが数部作製した内の地図帖の一部の
グアヤキルの部分
この地図帖は 1992 年に *Buccaneer's Atlas* Basil
Ringrose's South Sea Waggoner, 1682」

1) バルロベント艦隊

スペイン継承戦争(1701~1714 年)によってスペイン海軍は壊滅状態となった。フランス海軍の考えが持ち込まれ、全体改革が目指された。1718 年にスペイン王室艦隊が統合再編されたが、バルロベント艦隊は対象とならなかった。1719 年にスペインから 3 隻が同艦隊に到着し、また捕獲されたオランダ船 1 隻が手元にあり 4 隻となり、同年に 4 隻が加わったため 8 隻となった。これは最良の時期と同じで、全部合わせて 1,875 トネラダ、大砲は 154 門であった。この内、時期外れにベラクルスを立った 1 隻が失われた。しかし、艦隊は補助金^{シトウアード}を送る護衛に使われるぐらいで、稼働率は低く、何の任務も無い年が 2 年続いたこともあり、船は港で朽ちていった。人員簿に、1740 年には 1,216 人が登録されていたが、1745 年には 900 人ほどに減っている。1748 年 1 月 31 日の勅令によって、同艦隊は役目を終了した。その理由として、過大な経費に対して効果が少ないことが挙げられた。副王はこれに抗議したが、そこに書かれた理由は、未だ船が何隻か残っているからというものであった。給料の未払い分の整理とベラクルスにある全ての物の棚卸が終わったのは 1749 年 4 月であった。

2) 南海艦隊

南海艦隊は創立の法的根拠がないまま自然に形成された。それはカリヤオからパナマへの銀の輸送の護衛をするためであった。バルロベント艦隊は明確なものとは言えないまでも、それなりに創立を促す勅令が、艦隊活動終了を命じる勅令も存在した。南海艦隊は銀の輸送のための護衛艦隊から出発し、海賊達が南海に入り込むと、その偵察と撃破、また沿岸集落の護衛も活動の範囲に含められていった。その役割はバルロベント艦隊と似たものであったが、カリブ海の場合はインディアス船隊の護衛船がカリブ海での艦隊活動を肩代わりする場面も多かった。その反対にバルロベント艦隊がインディアス船隊の護衛や本国での艦隊に流用されることはもっと多かった。南海においては、ポルトベロの商品市がなくなると、カリヤオとパナマ間の護衛任務は減って行った。ペルーの銀は陸路ブエノス・アイレスへ運ぶ安全なルートが開発された。フランスは、海賊あるいは私掠から次第と手を引き、密輸活動を主とするようになった。密輸貿易は南米のスペイン人植民地にとっても生活、経済上欠かせないもので、現地では、その取り締まりに熱が入ることとはならなかった。イギリスの海賊活動にとっても、銀の海上輸送が減ると、南海の魅力は薄れていった。船員の調達も大きな問題であった。艦隊の船が港に係留されている間、経費を削減するために船員は解雇され、必要に応じて集められた。しかしそのような不安定な生活は海員達の望むところではなく、必要時に彼等を集めることは困難であった。南海艦隊は元々法律で創設された艦隊ではなかったので、これを法律で廃止する必要もなかった。スペイン本国は海賊などで艦隊が必要は時には本国から派遣すると言ったが、南米南端を越えて、それは無理な話であった。実際に英国の海賊アンソンが出現した時、本国のサンタンデルを出航したホセ・ピサロに指揮された 2 隻のナビオ艦と 3 隻のフリゲート船は

1741 年にマゼラン海峡を通過出来なかった。

7. Bibliography

- ① Las Armadas Españolas de Indias : Gaspar Pérez Turrado,1992, Madrid
- ② La Armada del Mar del Sur : Pablo E. Pérez-Mallaina & Bibiano Torres Ramirez, 1987, Sevilla
- ③ La Armada de Barlovento : Bibiano Torres Ramirez,1981,Sevilla
1987, Sevilla
- ④ The Lure of Peru: Peter Bradley, 1989, New York
- ⑤ El Filibusterismo: J.yL. Gall (traducción de Álvaro Cusodio),1957, México
- ⑥ Compendio Histórico de la Provincia,Partidos,Ciudades,Astilleros,Rios y Puertos de Guayaquil en Las Costas de La Mar Del Sur, Dionysio De Alsedo y Herrera, 1741,Madrid
- ⑦ El secreto del Imperio Español – Los situados coloniales en el siglo XVIII, Carlos Marichal, 2012, México
- ⑧ Letters written by The English Residents in Japan 1611-1623 edited by N.Murakami & K.Murakawa, 1900, Tokyo
- ⑨ Learning from SHOGUN – Japanese history and western fantasy, edited by Henry Smith, University of California, 1980, Santa Barbara
* William Adams to his "Unknown Friends and Countri-men" Oct.22, 1611, Japan
- ⑩ 海賊大全:ディヴィッド・コーディングリ編（増田義郎訳・監修）、2000、東京

完

